

【短編集】 須賀京太郎、ここにあり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

清澄の背景、解説前振りマン、ミスター棒要員、ハギ京、咲を麻雀部に入れるだけの人生、タコス買ってこい犬

そんな扱いを受ける不憫な京太郎のための短編集です。

京ちゃんを幸せにするためがんばります。

以下、概要と注意点

- ・ネタ、ギャグ、ほのぼのメイン
- ・各短編に繋がりはないか、あってもわかるようします
- ・闘牌描写はありません（できません）
- ・アンチ要素はちよつとしたスパイス程度です
- ・説明なく宮守が共学化してたり京ちゃんがテルー世代だったりします
- ・台本形式とか日記形式とかあります
- ・京ちゃんイエイ！

目次

ある冬の日	1
初詣の少し前／ある冬の日―2	6
鶴賀の日々	12
もし京太郎の京ちゃんが強ちやんだったら	29
お父さんのいない日曜日	39
阿知賀編第四局のあのシーンって心がきゅんきゅんする	49
テルー、大地に立つ	54
幼馴染のいままでとこれから／宮守	65
中学時代の京太郎と咲がダベるだけ	83

ある冬の日

「京ちゃんってさ」

「ん？」

「いろいろ出来てすごいよね。自動車のメンテとか、いつの間にか覚えてたし」

「そうだな」

「料理も上手だし、勉強もなんだかんだそこそこできるし」

「そうだな」

「この前編んでくれた手袋なんて手作りとは思えないくらい綺麗だったし」

「そうだな。咲」

「あつたかくて、やっぱり京ちゃんってすごいなーって」

「咲」

「何？」

「つまり？」

「……喉渴いた」

「……」

「あと、みかんほしいなーって」

「……はいよ」

「わあい、京ちゃんやっさしー！ いやあコタツから出るのってめんどくさいよねー」

「俺もコタツに入ってたんだけどなー？」

「私本読んでるし」

「俺は宿題してたんだが」

「ほい、茶とみかん」

「ありがとー。あ、みかんむいて」

「……今日のお前、いつにもまして生意気だな」

「たまにはそんな日もありますうー」

「うぜえ……」

「あー、寒いね、というか雪すごいよ」

「夕方から降るって分かってただろ。これ、お前帰れるか？ 迎えに来てもらったほうがいいんじゃないか？」

「お父さん出張中だし……どうしよ」

「後でうちの母さんに送ってもらおうか」

「んー。……よつと」

「おい、寝るなよ足伸ばせないだろ」

「京ちゃん足邪魔だよー。無駄にでっかくなっちゃって」

「なんだこいつ……いつにもましてうざいぞ」

「はあ、天国……」

「……」

「……」

「……」

「……ところでさ」

「……またかよ」

「いや、そういうのじゃなくて」

「はいはい。で、何？」

「京ちゃん、彼女とか出来た？」

「なにそれ嫌味？」

「いや、高校入る前、今年こそ彼女作るぞー！ って言ってたの思い出して」

「あー……そーいや正月にそんなこと言ったかも」

「ことしもあとよつかですが」

「二日あれば余裕」

「わあ、すごいね」

「……」

「いたっ！ いた、痛いって！ 蹴らないでよ！」

「咲のくせに！ 咲のくせに！」

「もお……。だいたい、京ちゃんはモテないわけじゃないのに」

「やめろよ……慰めるなよ……悲しくなるだろ」
「だってほら、優希ちゃんとか。仲良いじゃん」
「まあ、悪くはないけど。なんかそういう感じじゃないっていうか」
「ふーん」
「……」
「じゃあ、ほら」
「……」
「……和ちゃんとか、どう、なの？」
「どうって、何が」
「いや、昔に比べたら仲良くなったじゃん」
「あー……」
「どうなの？ 京ちゃん、好みでしょ？」
「……」
「……」
「特に何もないな。仲良くなったとは思うけど」
「……」
「横に座っても警戒されなくなったのは嬉しいかな」
「ふーん……」
「……なんだよ？」
「べつにー……」
「……」
「優希ちゃんとか、和ちゃんと付き合うことになったらちゃんと教えてよっ。」
「なんでお前に言わなきゃなんねーんだよ」
「保護者として責任があるんですー」
「お前が保護される側だろ……ほんとお前今日はうざいな」
「だからって蹴らないでよ！ 最低だよ女の子に対して！ あ、今お尻触ったー！」
「触ってねーよ蹴ったんだよ」
「なんで自慢げなの!？」
「けっ。あー……おい、吹雪いてんぞ外」

「うわ、ホントだ」

「これ帰るの無理じゃね？ 泊まってくか？」

「でも正月前に悪いよ。いろいろ忙しいだろうし」

「別に、大丈夫だろ。ちよっと母さんに話してくるわ」

「ん……ありがとう」

「おう」

「あ、立ったならついでに甘いものもお願い！」

「うるせえ」

「……はあ」

「……なんでだろ。ほんと。独占欲なのかな」

「咲ー？ 母さん泊まってるっていいってさ」

「やった。じゃあ、まだゴロゴロする」

「ずっとゴロゴロしてたけどな」

「いいのいいの。それにしても、もうこんな時期かあ。今年もいろいろあったね」

「全国いったりな」

「楽しかったなあ。来年は京ちゃんも一緒に全国出ようよ」

「おう。最近やっとトップ争いに入れるようになったからな。今に見てるよ」

「団体も行けたらいいんだけど……男子、入るかな？」

「俺、インハイも秋もパツとしなかつたからなあ……むしろ、俺の存在を知ってる奴はいるんだろうか」

「女子は和ちゃんと優希ちゃんの後輩が来るらしいから、心配ないんだけど。男子かあ」

「和目当てで来たりして」

「そんな、京ちゃんみたいないな人がいるわけないじゃん」

「おい外に放り出すぞ。ま、来なくても個人で頑張るさ。女子がたくさん来たら肩身が狭くなりそうだけど」

「京ちゃんなら大丈夫だよ。そもそも今だって男子一人じゃん」

「それもそうか」

「そうだよ。だから来年も……」

「ん？」

「来年も、よろしくね。京ちゃん」

「……おう。よろしくな、咲」

「……えへへ」

「つかそれ年明けてから言えよ。まだ正月気分にもなつてねえよ」

「いーの。今思っただから。えへへ」

「……はいはい」

カン

初詣の少し前／ある冬の日―2

この季節は真昼間でも外出を躊躇う。

日が出ているとはいえ空気は刺すように冷たいし、雪が降れば冷たいし濡れる。京太郎自身、体を動かすのが好きな方だが、冬だけは家でゴロゴロするのが一番だと思っている。

それが正月ともなれば、ひたすらテレビを見て、おせちを食べ、寝るだけの毎日だ。

まあ、日本全国それはあまり変わらないだろう。家から出る用事は挨拶回りや初詣くらいであり、京太郎もまた、初詣のためにコート・マフラー・手袋と重装備でコタツという楽園から離れていた。

「寒いね」

手袋を頬に当て、身を小さくしながら隣を歩く咲とは、既に新年の挨拶を終えている。

麻雀部一同で初詣をしよう、と言い出した優希だった。さすがに元日はそれぞれ予定があるだろう、という事で集まるのは二日になった。

「耳当てもつけてくればよかったのに。去年まで使ってた奴、まだ使えるだろ」

「なんか、子供っぽいような気がして。あと、耳当てじゃなくてイヤーマフって言うんだよ」

「同じだろ。それに子供っぽいって……気にすることか?」

「気にするの。今からみんなに会うんだし」

「そういや、学校にも着けていってないもんな。でも、もうちよつと厚着してこいよ。スカートとか見てるこっちが寒い」

「タイツもあるしそんなに寒くないよ。一応、おしゃべりしてるんだからそんなこと言わないでよ」

「すまんすまん」

会話しながら、少し驚いていた。咲もそういうのを意識するんだな、と。もちろん、ずっと見てきたので中三ぐらいから女の子らしい格好や言動をするようになったのは覚えている。それでも、咲からそういう事を言われるのはなんだか慣れない。言葉にするのが難しい、居心地の悪さを感じるのだ。

「まだ誰も来てないね」

「ちよつと早かったかな」

集合場所にはまだ誰も来ていなかった。周りを見まわすが、人影は無い。携帯を確認すると集合時間までまだ二十分あった。

「ずっと立つとくのもなあ。どこかで時間潰すか?」

「どこも開いてないよ。コンビニとか、ちよつと遠いし」

「あー……失敗したな」

そういえば、まだ三が日の真っ最中だ。運の悪いことに、太陽に雲がかかり一気に寒さが増した気がした。

足踏みして気を紛らわしつつ、咲を見ると、同じようにぴよんぴよん跳ねていた。寒いな、なんて無駄なことを言い合っていると、咲が何かを思いついたようにぽん、と手を叩いた。

「京ちゃん、京ちゃん、コート開いて」

「は? 貸さねえぞ」

「そうじゃなくて。ほら、はやくはやく」

言いながら、コートのボタンを外してくる。いたずらかと額を押しで抵抗するが、それでもボタンに手を掛けるので好きにさせることにした。

すぐにボタンが全て外れコートが開かれ、冷たい空気が流れ込んで

きた。体が一瞬震えるが、なぜか、その後すぐに暖かさを感じた。

「えへへ。あつたかい」

驚いて下を見ると、コートの中、胸元のあたりに咲の頭がある。

「お前……」

「京ちゃん、コート閉めて。風が寒い」

言われるがまま咲を包み込むようにコートの端を合わせた。咲はこちらを向いているので、胸元に顔を埋めている状態だ。収まりが悪いのか腕を少し動かした後、そつと俺の腰の辺りに手を添えてきた。

「これは……なんというか、幼馴染的にはちよつとやりすぎなんじゃないか？」

「……そうかな？ 私は別に嫌じゃないけど」

俺も嫌じゃない。そう言おうとして、言葉が喉に詰まった。

最近、咲との距離が以前よりも近くなった気がする。隣に座ったり、肩を叩いて呼んだり、というのは昔からあった。それに特に何も感じなかった。だが、最近は同じ事をするのに緊張したり、躊躇ったりすることがある。それなのに咲は気にせず触れてくるし、距離を測ってくる。今だって傍から見ればカップルが抱き合っているようにしか見えないだろう。

「お前はあつたかいかもしれないが、俺は寒い。空気が入ってくる」

「ちよつとくらい我慢して。男の子でしょ」

そう。俺は男で、咲は女。それを意識するようになったのかもしれない。

「咲のくせに偉そうだな。……みんなが来る頃には離れろよ」
「ん」

俺と咲が仲良くなったのはなんでだろう、とふと思った。

中学一年だというのは覚えているが、確実に『ここから』というきつかけは思い出せない。特別な何かがあったのではなく、なんとなく仲良くなって、なんとなく一緒にいた。清澄に入ったのも、お互い話し合った訳でもなく、二人とも家から近いからという理由だった。偶然クラスがずっと一緒に、縁が切れなかった。それだけのように思える。

「ねえ、そういえばさ」

「喋るなら顔離せ。なんか、息がこもってくすぐつたい」

ぼうつとした暖かさが胸元に広がり、そこを意識してしまう。咲がもぞもぞと動いたが離れる気はないようで、顔を横に向けただけだった。

「んん……。そういえばさ、私と京ちゃんって幼馴染だよな？」

「そう……。なんじゃないのか？ 急にどうした？」

「本読んでるとき、幼馴染って幼稚園とか、小学校とか、そこらへんから一緒にいるんだよな。私と京ちゃんって中学からじゃん。なんか、弱くなって。家もそんなに近くないし」

「ああ、マンガとかドラマだったら、だいたいそうだな」

「それで、私たちってどうなんだろうって。まあ、十年くらい経ったら小学校から中学からも変わらないから、別にいいかって思ったんだけど」

「……そうか。変なこと考えるな。さすが文学少女」

「変って言わないでよ。京ちゃんが本読まなすぎるんだよ。貸してもまともに読まないし」

「挿絵がねーんだもん。もっと絵が多い奴にしてくれ」

「あれ以上多いのはもう漫画しかないよ。はあ……これだから京ちゃんは」

たぶん、十年後は一緒にいない。

そう思った。あと二年は同じ高校だし、もし進級でクラスが変わっても部活がある。でも、その後は分からない。俺はたぶん大学に行くと思うけど、咲が同じ大学に行くとも限らないし、もしかしたら咲はプロになるかもしれない。インターハイであれだけの成績を残したし、これからも成長し続けたら、きつとトッププロにも届く。

寂しくなった。無性に、寂しいと思った。

「難しいのじゃなくて、面白いの……いや、読んでて楽しいの選んでくれ。そしたらたぶん読む」

「ほんとに？　じゃあ、帰りにうち寄ってよ。冬休みの暇つぶしに、いいの貸したげるから」

今、自分のコートの中にいる少女が、自分では手が届かないところに行くのが、自分のいるところから離れていくのが、嫌だと思った。

たぶん、独占欲なのだろう。咲は人付き合いが苦手だし、いろいろとぼんこつだから、俺が面倒をみてきた。子供とか、妹とか、そんなふうに思っているだけだと思う。

しばらく、そんなことを考えていた。咲に「今何時？」と聞かれて、ぼんやりしていた自分に気づき、周りを見回した。誰もいない。携帯を確認するとそろそろ誰かが来てもおかしくない時間だった。

「八分前」

「じゃ、出ようかな。……うう、やっぱり寒い。ありがと、京ちゃん」

「……おう」

咲が離れ、冷たい空気が体を撫でる。胸元に残った暖かさだけが今までそこに咲がいたという証拠だったが、それもすぐに冷やされ、よくわからなくなった。

「咲」

「ん？ なに、京ちゃん」

乱れた前髪を直しながら、こちらを見上げる咲。

その笑顔が、なんとなく、いつもより可愛く見えて。

「後でジュースよろしく。暖房代な」

「京ちゃんもあつたかかったでしょ？ お互い様ってことで」「ちっ」

なんとなく、気に入らなかった。

カン

鶴賀の日々

俺がそいつと出会ったのは、鶴賀に入学したその日だった。

いや、出会ったというほどのものではない。普通に、隣の席の奴に「よう。俺、須賀京太郎。これからよろしく」と話しかけただけだ。俺からすれば、特別なところなんて何も無い。隣の席だし、なかなかのおもちな女の子だったから話しかけてみたっていう、それだけのことだった。

だが、そいつ——モモにとっては、そうではなかったらしい。

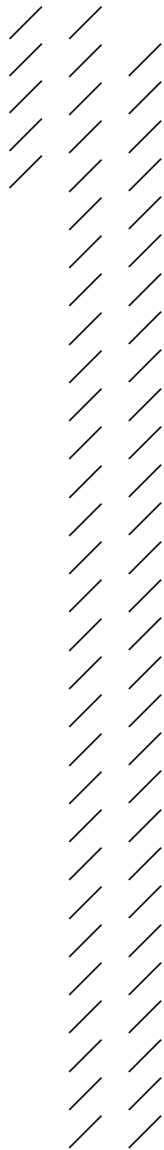
一目で分かるくらいうろたえ、どもり、まともに返事をしてくれなかった。その時は『男子が苦手なのかな』くらいにしか思わず、「悪い、驚かせたか。まあ、よろしく」とだけ言って会話（一方的だったが）を終えた。すぐに担任が入ってきたし、頭の中はこれからの高校生活でいっぱいだった。

彼女は出来るか、部活は何にしようか、そんなことを考えながら担任の言葉を聞いていた。

後で言われて知ったのだが、その時モモは俺のことをずっと見ていたらしい。モモの性質を考えるとそれも不思議ではないが、「せっかく私を見てくれる人と出会えたかもしれないのに、さっさと会話切り上げてアホ面でのんびりしてる京さんにちよつとイラツとしたっす」とまで言われたのは、少し心外だと思う。

まあ、つまり。

『ステルス』東横桃子は、その日、俺に見つかったのだ。



「……京さん。何度も言うんですけど、おっぱい見るなっす」

「何言ってるの？ 見てないよ？ ですよね、蒲原部長」

「え？ うーん……ちよっと私にはわからないな」

「ほら、部長も見てないって」

「私が！ ステルスだから！ 部長たちは気づけないだけっすよ！

山からツモる度におっぱいガン見される私の気持ちを考えてほしいっすー！」

「おー、モモが見える。さっきまでステルスだったのになー」

「よっしゃあ！ ステルスモモ敗れたり！」

「それでも京太郎がラスなのはたぶん変わらないけどなー」

「ですよねえ……」

「見えてるのに無視されるのが一番心に来るっす……」

「す、すまん。あの、無視するつもりはなくて……」

「泣くなモモ。京太郎はバカなんだから広い心を持て。ワハハ」

「あの、須賀君のツモ番なんだけど……」

鶴賀に入学して二週間経った。中学ではずっとハンドボールをしていたが、俺はハンドボール部には入らなかつた。モモから麻雀が趣味だと聞き、それならとモモを連れて麻雀部のドアを叩いたのだ。

卓を囲んでいるのは俺、モモ、いつもワハワハ言ってる蒲原部長、いつもうむうむ言ってる睦月先輩。あと二人、姐御オーラがすごい加治木先輩とおもちがすごい佳織先輩がいるが、今は外れている。

「須賀はどうしてああなんだろいな。妹尾、お前も被害者だろう？」

「まあ……はい。加治木先輩もですよね」

「あれさえなければ好青年なんだがなあ……」

モモは強かった。部に入ってからルールと役を覚え始めた俺ではまったく歯が立たなかつた。加治木先輩や部長曰く、それでもモモが見える分、他の部員より俺は有利であるらしい。対局中の本気のステルスモモが見えるのは今のところ俺しかいない。加治木先輩や部長はなんとなくコツを掴んだと言って、普段の生活の中だったらそこそこ見つけられるようになっただが。

「それロン！　ざまあみろっすー！」

「トバされた……」

「狙い撃ちとは、モモも酷いな。ワハハ」

「京さんが悪いっすよ！　見るなってさっき言ったのに何回おっばい見れば気が済むっすか！　ああ、もう怒るの疲れた……」

そこにおもちがあるからさ……。ツモる度に揺れるってすごい。最初、モモは見た目から大人しい奴かと思ってたが、そんなことはなかった。表情はあまり変わらないが、言う時は言うし怒る時は怒る。今は怒ってる。てへ。

ちなみにだが、同時期に入部した素人の佳織先輩にも、俺は負け越している。むしろ得点収支で比べたら話にならないレベルで俺の負けだ。なんである人ぽんぽん役満和了るんだろう……。リアルだと俺は役満どころか倍満すら和了ったことないのに……。

「さて、須賀と蒲原は交代だな」

「おー。京太郎、準備しろー」

「うっす。でも、本当にいいんですか？」

卓から立ち、少し離れた所に置いてあるパソコンに向かう。電源を入れ、大手のネット麻サイトを開きつつ、隣に座った蒲原部長に問いか

けた。

現在、鶴賀学園麻雀部はインハイの地区予選に向け、絶賛特訓中である。

俺がモモを連れて入部したことで団体出場に必要な五人が集まった。今まで人数が集まらず歯がゆい思いをしてきた先輩方……特に三年生の二人にとっては、最初で最後のインハイだ。正直、俺は素人の男子だし、地区予選もすぐそこだし、しばらく麻雀は出来ないと思っていた。意外と、しなきゃならない雑用は多いし、他校の対策を立てるにも人手がいる。人数が集まって、加治木先輩が大会に向けた今後の予定を話し始めた時、俺はそっちに回されると思っていた。

「何回同じ事を言わせるんだー？ 京太郎が一番弱いんだぞ。そんな事言う暇あるなら勉強するんだなー」

「一人でも教本読んだりできますし……先輩たちが付いて教えてくれるのは嬉しいんですけど、悪い気がするんです。……先輩たちは最後の大会なのに、俺なんか時間に時間を使うのはもったいないですよ」

だが、言い渡されたのは他の部員と変わらない、普通の練習だった。放課後になったら部内で数回打った後、CPU相手にパソコンで麻雀。蒲原部長か加治木先輩が他校の牌譜の整理や対策を練りつつ、俺に付いて指導をする。そんな内容だった。素人という事で、牌効率から河の読み方まで、じっくり教えて貰っている。特に加治木先輩も高校から麻雀を始めたらしく、状況に応じた打ち方を分かりやすく指導してくれる。

雑務の割り当てはそこそこあるが、先輩方にも振られていた。むしろ一年なのに少ないんじゃないか、とも思った。

「私とユミちゃんは三年生。後輩の指導は今年しかできなくて、それをしなかったら先輩失格だ。だいたい、再来年どうする気なんだ？ モモはあれだから、むつきーいなくなったら部長は京太郎なんだぞ？ へっぽこ部長じゃお前の後輩が可哀想じゃないか」

「部長……。俺、はじめ、改めて蒲原先輩が部長だつてことを実感して
ます……………」

「今初めてって言いかけなかったか？　ワハハ、泣かすぞ」

「しまった！　つい本音が！」

「本音だったのかー」

「すんません！　冗談です！」

「そうかー。ワハハ」

言葉ではふざけてみたが、少し、感動した。

加治木先輩が実務的な部分で部長の仕事をしているが、やっぱり部長は……………麻雀部の芯となっているのは蒲原先輩だな、と。

「実は、入ったところ大会までは雑用しようと思つてたんですよ。一人だけ男子ですし。ほら、掃除とか買出しとか、牌譜の整理だったら俺でもできますし。自動卓担いだりとか。しばらくそういうのかなつて」

「自動卓？　二人しかいない一年に全部やらせるわけないだろ。それに、素人の新生にそんなことばっかりさせる奴がいたら鬼か悪魔だ。ワハハ」

いつもの様に、蒲原部長はニコニコと笑っている。お前も部員で、大事な仲間なんだぞ、と俺に言っているように聞こえて、少し恥ずかしかった。

……………最初は、モモの付き添い程度の軽い気持ちだった。

自分を見てくれる人が一人いればそれでいい。モモがそんな事を言うのが悲しくて、半ば無理やり麻雀部に連れて行つた。モモからすれば迷惑かもしれないが、まずは知り合いを増やすべきだと考え、興味を持っていてならどこでもいいと麻雀部を選んだ。もし失敗したら辞めればいい。そう思っていた。

でも、今は違う。先輩たちの期待に応えたい。じやなきや、最低な

ヤツになっちまう。それに……。

「モモ、どうした？」

「加治木先輩……私、京さんをどうしたらいいか、本気でわからないっす……なんでおっぱい見るっすか……」

「あー……須賀はちよつとアレな面があるが、男なんて大体あんなもんだぞ」

「そうなんっすか？ ええー……」

「うむ。桃子は見えにくいから、そういう視線を向けられなかったんだろう。ある意味幸運だったな……」

「そうだよ、桃子さん。嫌だけど、慣れなきややっていけないんだよ……」

「ええー……」

雀卓に肘をついて頭を抱えているモモを、みんなが慰めている。理由が理由だけに素直に喜べないが、その光景は麻雀部に入らなければ存在しなかったものだ。もう、モモは世界に一人ぼっちじゃない。

俺のおかげだ、なんて言うつもりはないけれど。入部して、みんなと触れ合うようになって、モモは毎日楽しそうだ。その姿を見ていると、自然と頬が緩む。

……あと、ごめん、モモ。正直そこまで男に免疫ないと思ってなかった。おもちが悪いよ。あんなに素敵なんだもん。

「こら、京太郎。あれだけモモが悩んでるのにまーたおっぱい見てるのか。友達一号なんだろう。優しくしてやれ」

「……マジ、すんまつせん」

後でジュースでも奢って機嫌をとろう。モモはそういう『普通の友達』がするような事をする、すごく喜ぶ。不幸な過去を好いように使っている気がして後ろめたくなるが、使えるものは使う主義だ。

そういえば。清澄に行った中学のほんこつクラスメイトは高校で馴染めただろうか。

ふと、思い出した。



「京さん京さん！ 海っすよ！」

「そうだな……」

「え、どうしたんすか。テンションひつく……」

「だってさ……せっかく海に来たのに……泳げないじゃん……」

「そんなに泳ぐの好きなんすか？」

長野地区予選を目前に控え、我らが麻雀部一同は——蒲原部長に誘われて、海に来ていた。親睦会と新入生の歓迎と特訓の疲れを癒すため、だそうだ。

部長が免許を持っているのは驚いたが……それよりも運転が酷かった。死ぬかと思った。正直もう二度と乗りたくない……。モモはなんでこんなに元気なんだろう。今も俺の腕を引き、ぶんぶん振り回している。

「ワハハ。水着の女の子がいなくて残念そうだな」

「げっ。バレた」

「京太郎の考える事だからなー」

現在五月下旬。暖かくなつたが、それでも泳ぐには早い。せつかなら夏に来て、モモと佳織先輩のおもちを拝みたかった……！

蒲原部長がワハワハ言いながら砂浜に下りていき、佳織先輩と睦月先輩も着いていった。モモはまだ俺の隣にいて、唇を尖らせている。

「もー。ほんとそんなんばつかつすね。変態さん」
「面目ない」

モモと連れ立って砂浜に立つ。潮風が気持ちいい。気温も丁度いくらいで、日向ぼっこするのもいいかもしれない。暑くなったら靴を脱いで波打ち際を歩けばきつと冷たくて気持ちいいだろう。

レジャーシートを広げ、各々の荷物を置く。とりあえず腰を下ろして何をしようか考えていると、部長が加治木先輩の腕を取りつつ、俺を見てにやりと笑った。

「京太郎、荷物番よろしく。後で交代するから。ほらユミちゃん、行くぞー」

「え？ 蒲原、私はいって。おい、引っ張るな！」

「了解です。モモ、お前も行ってくるか？」

「いえ。私も一緒に荷物番するつすよ」

部長たちに佳織先輩と睦月先輩も付いて行き、モモは俺の隣に座る。すぐ横に座られたので肩が少し触れた。ちらりと横を見ると、モモは薄く微笑んで海を眺めている。その横顔は綺麗で、少しドキドキした。こうしてじっくり見るのは初めてかもしれない。そう思うと緊張して喋りかけられなくなった。先輩たちは見えるところにいるが、少し遠いので声は聞こえない。モモも何も喋らないので、波の音だけが響いている。

まあ、モモとは鶴賀に入ってからずっと一緒にいたから、気まずい

とは思わないけど。

そのまま仰向けに寝転がる。波の音を聞きつつ空を眺めてぼんやりしている、モモが振り返った。

「こういうのもいいっすね」

「ん？ ああ、気持ちいいよな。心が落ち着くって言うか」

「そうじゃなくて……。ただ静かに、二人つきりで過ごすのも、ってことっすよ」

咄嗟に言葉が出なかった。

「ちよつと前まで、ずっと一人だったから。静かなのは嫌いだったっす。世界から本当に私がいなくなったように思えて。だから……友達ができたら、いろいろしようって思ってたっす。喋って、遊んで、騒いで……。でも、隣に誰かがいてくれるなら、静かなのも嫌いじゃないなって。まあ、そういうことっす」

そう言つて、モモが俺を見つめてくる。

何を言えばいいかわからない。嬉しかったし、悲しかった。誤魔化すように「そうか」とだけ呟いて腕を目を覆った。モモが「なんすかー」と不満気に指で突いてくるが、空いてる方の手で適当に相手をする。

少しの間じやれついていたら、指を掴まれ、そのままぎゅつと握られた。

「また夏に来ましよう。今度は泳いで、はしゃいで、騒がしく過ごしたいっす」

「……ああ。夏になったら、また来よう」

「約束っすよ」

嬉しそうなモモの声。口元は隠せてないので、俺が笑っているのも

バレているだろう。

繋いだままの指先が、とても熱く感じた。



インターハイ長野地区予選から二週間が経った。

鶴賀は決勝まで行ったが、負けてしまった。対戦相手は昨年度優勝の龍門淵、強豪の風越、そして咲の行った清澄だった。

高校に入ってから連絡を取ってなかったので会場で咲と会ったときは驚いたが、それより麻雀の強さに驚いた。いつも本ばかり読んでいて、大人しくて、小動物めいた咲からは想像できない姿だった。

清澄が優勝を決めた時は鶴賀が負けた悔しさと、咲が勝った嬉しさで複雑な気持ちで。その後会った咲もそわそわしてこちらを氣遣っていたが、頭を全力で撫でてあうあう言わせてたらいつもの咲に戻った。全国でもがんばってほしい。

先週の個人戦でも、残念ながら鶴賀の面々は振るわず、俺たちの夏は終わった。俺は一日目の午後で予選落ちしてしまい、面倒を見てくれた部長たちに申し訳なかったが、二人とも笑って「よくやった」と褒めてくれた。午前で落ちなかっただけで十分らしい。嬉しかったが、悔しかった。来年はせめて本選に……いや、目指すなら全国優勝だ。

三年生の二人は引退し、新しい部長には睦月先輩が就いた。まだ数日しか経ってないので、「部長」と呼んでも反応してくれないのが少し面白い。現役部員が素人二人にステルス一人と、心労が増えそうな布陣だ。本人は「部長なんて柄じゃない」と頭を抱えてたし、先日清澄から四校合同合宿のお誘いが来た時も返事を書くのに苦労していた。

丁度、皆はその合宿に向かっている所だ。

もちろん俺は留守番である。女子ばかりの合宿に付いていける

はずもない。少し残念だが、合宿所には元部長の車で行くと聞いた時、むしろ感謝した。俺はまだ死にたくない。皆は地獄の二丁目を曲がった頃かな。合掌。

ついさつき見送った先輩たちの無事を祈りつつ、振り返った。

「先輩たち、テンション高かったな」

「大会の後、打ち足りないって言ってたっすからね。お誘いが来た時、清澄にリベンジだ、わははーってノリノリだったっすよ」

モモも公道アトラクション回避組だ。家の用事があるらしい。一応後輩として先輩方を見送ろう、とモモが言い出した時は不思議に思ったが、これはこれで役得だった。

今日は休日なので、俺もモモも私服だ。モモの私服は初めて見たが……なんというか、可愛い。いつもの三倍くらい可愛く見える。それに少し胸元が広い服で、谷間がもう少しで見えそうだ。見たらまた怒られるので、なるべく見ないようにしているが……拷問だ。見たい、すっごく見たい。

空を見上げながら煩惱と戦っていると、モモが近づいてきてそのまま腕に抱きついてきた。驚いて固まってる間に柔らかい感触が腕を包み、がちりと捕まえられる。

「ところで京さん。この後暇っすか？」

「あ、ああ……暇だけど……」

「だったら、デートしませんか？ 私の家、ここから近いんですよ」

モモは俺を見上げて、にっこりと笑っている。笑っている……のだが、なぜか睨まれているような迫力があつた。つて、今こいつ何て言った。

「え？ 家？ デート？」

「じゃ、行きましよう。こっちっすよ」

腕を抱かれていますので抵抗も出来ず引つ張られるまま歩く。え？
デートするの？ 家に行くの？ 本当に？

「お、おい、どういふこと？」

「安心してください。両親は外出中です。夜まで帰ってこないですよ」

「本当にどういふこと!？」

「うるさいっすね。すぐそこっすから、ちよつと黙っててください」

唇を尖らせて、不満気に腕を引つ張られる。「モモ？ モモさん？」
と話しかけても無視され、そのまま連行された。

「ここが私の家です。さ、あがってください」

「マジなの……?」

「マジっす」

十分ほど歩き、普通の一軒家に案内された。ビクビクしながら家に入ると「私の部屋、二階なんで。先に行つててください」と言われ、さらにビクビクしながら階段を上がる。

『MOMO』と書いてあるプレートが掛けられた部屋があったので、たぶんここだろうと扉を開いた。咲以外の女の子の部屋に入るのは初めてだが……なんというか、すごくいい匂いがする。そのまま少し待っていると、モモがお盆を持って入ってきた。お盆にはコップが二つ乗っていて、たぶんお茶だろう茶色の液体が入っている。

「なんで立ってるんすか？ 適当に座ってください」

「おう……」

テーブルの傍に胡坐を掻いて座ると、すぐ横にモモも腰を下ろす。近い。自然に腕を組まれ、手も繋がれた。しかも恋人繋ぎ。

まったく何がなんだかわからない。離れようとするもモモも付いてきて、すぐ距離を詰められる。笑顔で俺の肩に頭を寄せ、手に力を入れたり抜いたり、にぎにぎされる。

「驚いたっすか？」

「驚くなんてもんじゃねえよ……。急になんなの？ 悪いもんでも食った？」

「うわ、それは傷つくっす。せつかく、私が勇気出したのに」

体を軽くぶつけられる。甘えるような、弱い衝撃だったが、柔らかい感触にさらに緊張する。口の中がからからに乾いてしまっている。

「まあ、ここまで直接的なのは初めてっすからね。でも、今までもアピールしてたっすよ？ スルーされてましたけど」

コップを取り、お茶を一口飲む。面白そうに俺を見るのは変わらず、モモは言葉を続ける。

「あ、おっぱい見たいなら見ていいっすよ。今日から解禁っす。でも、会話してる時は顔見てくださいね」
「……」

これって、たぶん……。そういう事、なんだよな？

「触るのは……まだ、お預けっす。責任取ってくれるなら別にいいっすけど」

触っていいの!?

いやいや、そうじゃない。ここで調子に乗って「じゃあ」なんて言ったら最低すぎる。

「つまり……あの、モモは俺が……？」

「好きっす。大好きっす」

恥ずかしがる様子もなく、モモは言い切った。

今までの人生で告白されたことなんてなかったから、すごく嬉しい。モモは可愛いし、優しい。今まで意識しなかったと言えば嘘になる。でも、あまりにも急すぎて戸惑いの方が大きかった。

イエスか、ノーか。少し考えて、ノーと言う理由がなかった。友達としても、女の子としても、モモは好みの女の子だ。強いてあげるなら、まだ出会って二ヶ月という所が少し心配か？ でも、そういうのに時間は関係ないってよく言うよな。

覚悟を決めて返事をしようと口を開き——それより早く、モモに遮られた。

「あ、返事はまだいいっす」

「……は？」

「これは宣戦布告っすから。京さんを口説き落としてみせるっっていう……予告？」

「……どういう事なの、本当に……わけがわからん……」

頭を抱えながら、モモの言いたい事を整理する。えっと、モモは俺が好きで、告白したけど、返事はほしくない。……さっぱりわからん。というか、モモは俺のどこが好きなんだろう。もしかして、俺にステルスが効かないからか？

もしそうだったら……なんか、嫌だ。モモにとっては大事なことだっっていうのは分かるけど、それだけで付き合うのは違う気がする。そう思っているのを察したのか、モモが顔を近づけてきた。

「別に、私を見失わない人だからって訳じゃないっすよ。もちろんそれも理由の一つだけど、私が惚れたのは、京さんの優しいところっす。私のために麻雀部に連れて行ったり、孤立しないように先輩たちとの

間を取り持ったり。そういうところが大好きっす」

「……そういうつもりは」

「私を連れて行く前に蒲原先輩と加治木先輩に相談してたり、他のクラスメイトにそれとなく私の存在を気づかせようとしたり、人混みの中で私が他人に押されないように気を遣ったり、そういうところにきゅんきゅんくるっす」

「……あの」

「おっぱい見てにこにこするのもバカっぽいけど可愛いし、麻雀を打ってる時の横顔はキリツとしててかっこいいし、意外と筋肉あつて男の子らしいところが」

「もうやめて……恥ずかしい……」

「えー、まだ序の口っすよ？」

たぶん俺の顔は耳まで真っ赤になってるだろう。まともにモモの顔を見られない。感情をぶつけられるのがこんなに破壊力抜群だったとは。世の中のカップルはいつもこんなことしてんのか？ すぎすぎる……。

「でも、なんで返事はいらさないんだ？ その、別に口説き落とす、なんて言わなくても……」

直球で勝負に来ているのに、そこだけが不思議だ。普通、返事はすぐほしいものじゃないのか？

そう思っただけ聞かけると、モモは薄く、寂しそうに笑った。

「……まだ、リンシャンさんに勝ってないっすから」

「……咲にっ？」

……どうして、ここで咲の名前が出てくるんだ？

地区予選の時皆に咲を紹介したから、俺と咲がただの幼馴染だっただけというのは分かっているはずだ。元カノなんじゃないかー、なんてから

かわれたけど、俺も咲も否定した。

「たぶん、リンシャンさんも京さんの事が好きっす。自覚はしてないかもしれないっすけど。中学時代、一緒にいて、面倒を見てたんすよね？ だったら普通惚れるっす。惚れない訳ないっす」

そこ断言する所なのか？

「大会の時、私が京さんに甘えてたらむつとしてたんで間違いないっすよ。……京さんを渡す気はないけど、ズルはしたくないっす。正々堂々と、自分のものにしたいです。だから、リンシャンさんに『私に告白された』って伝えてください。そしたら私とリンシャンさんの勝負開始っす」

「……ちよつと、何言ってるかわかんねえ。モモはそれでいいのか？」
「いいっす。これから全力で京さんを落としますから。おっぱい解禁も、おうちデートも、そのためっす」

たぶん、咲の事は勘違いだと思っただが……。今ここで返事しても、受け入れてくれそうにない。それほどの決意が伝わってきた。どうすればいいんだろうか。落とすと言われたが、既に落とされてると思う。返事はいつするべきなんだ？

いろいろと気になる所はあるが、嫌じゃなかった。何かを企んでそうな、ちよつと悪い顔をしているモモが可愛くて、咲の事が勘違いだと分かるまではそれを楽しんでもいいんじゃないか、なんて事も考えてしまったが。

「同じ学校というアドバンテージに、おっぱい大好きな京さんも満足できる私のスタイル、そして私の性質を無視できない京さんの優しさ。全部私の味方っす。絶対、絶対負けません」

耳元で、ささやくように宣言するモモ。

どういふふうに口説かれるんだろうという期待に、胸が高鳴って。

「ここからは、ステルスモモの独壇場っすよ」

これからは、モモから目を離せないな、と思った。

もし京太郎の京ちゃんが強ちやんだったら

「ふわあ……んんっ……すみません」

「のどちゃん、どうしたんだじよ？ 最近あくびとか多いじえ」

「仮眠する事も多くなつたし……眠れてないの？」

「いえ……ちよつと……」

「……本当に大丈夫なのか？ 授業中もたまに寝てるし、のどちゃんがそんなことするなんて中学校の頃もなかったじよ」

「何か、悩み事でもあるの？」

「いえ、本当に大丈夫ですから……」

「……もしかして、京太郎の事か？」

「二人が付き合い始めてそろそろ二ヶ月だね。京ちゃんと何かあったの……？」

「……………」

「そっか、京太郎の事なのか」

「い、いやっ！ ちがつ……」

「今、和ちゃんの顔に『この二人には言えない』って書いてあったよ」
「……………違います。京太郎君のことではありません。気にしないでください」

「もう言ってるようなもんだじえ。……まあ、和ちゃんが相談しづらい気持ちはわかるじよ。だって……私たち三人で京太郎を取り合つて……和ちゃんが選ばれたんだから」

「でも、『誰が選ばれても、その人を祝福しよう』って決めたよね。同じ人を好きになってしまったけど……私たちは親友だから。だから、喧嘩はしないって。……私、二人には幸せになってほしい。困った事があるなら、言ってほしい。二人とも大事な人だから……」

「優希……咲さん……」

「気を遣う必要なんてないじよ」

「そっだよ。ね、どうしたの？ 京ちゃんと喧嘩でもしたの？ そんな雰囲気なかったけど……」

「いえ、喧嘩はしてません。その……」

「……？」

「……？」

「遠まわしに言いますと……愛されすぎてつらいんです」

「あ、昨日のドラマ見た？」

「見たよー。設定が斬新だったよね。まさか青森にメソポタミア文明の対宇宙人用決戦兵器が眠ってるなんて」

「あれ？ 助けてくれるんじゃないんですか？ 割と深刻なんですけど」

「それとこれは話が別だよ」

「惚気に付き合う気なんてないよ」

「いや、惚気じゃなくて……本当に困ってるんですよ」

「愛されすぎて辛いのか、そっか。よかったね」

「安心したよ。じゃ、この話やめよっか」

「……愛される場所の問題なんです」

「場所？」

「え？」

「……ベッドの上で愛されすぎてつらいんです」

「……」

「……」

「……」

「それを私たちに言っただけでどうするんだじよ。私、経験ないし」

「自慢にも付き合う気はないよ。私も経験ないし」

「違うんです！ 本当に違うんです！ やばいんです！」

「一応友達として聞いてやるから落ち着くじよ原村さん」

「でもどうでもいい事だったら覚悟してね原村さん」

「あ、今さらつと親友からランクダウンしましたね？ あはは」

「はやくしろや」

「……はい。京太郎君が絶倫すぎるんです。受け止めきれなくて、もう腰が重くて……」

「……別に、悪い事じゃないんじゃないのか？」

「そのうち落ち着く……んじゃない？　というか、本人に言えば控えてくれると思うんだけど。京ちゃん優しいし」

「いえ、男性がそういう欲求を抱くのは普通の事ですし……京太郎君には我慢してほしくないなって。いろいろ調べたら、我慢するのはつらいって書いてありました」

「それでのどちゃんが体を壊したら元も子もないじよ」

「うん。京ちゃんに言うしかないと思うよ？　別に、今まで一人だったんだから我慢できるでしょ」

「……それしかないんでしょうか、やっぱり」

「うん」

「言いつらいと思うけど、言わなきゃいけないことは言わないと」

「……そうですよ。ありがとうございます」

「でも、のどちゃん体は強いと思ってたじよ」

「私も。体力ある方だと思ってた。体育とかでも普通に走ってるし」

「ええ、私も体力には自信がありました。麻雀も意外と疲れますから、トレーニングは欠かしていません。それでも、受け止めきれないんです」

「……そんなに？」

「……やばいの？」

「具体的に言うと……今のところ、最長で8時間愛されました。休憩なしで。私が気絶して終わりましたが、京太郎君は平気そうでしたね。一時間後くらいに私が起きたらすぐ再開して、また5時間続きましたから」

「まじっ？」

「まじっ？」

「まじです」

「それは、なんとも……のどちゃんも大変だな」

「さすがに同情するよ……」

「あ、さつき失った友情が戻ってくるのを感じます。うふふ。ね、深刻だったでしょ？」

「調子に乗るなよ原村」

「そのずうずうしさに感心するよ原村」

「あ、また落ちた！ もー、いったいどっちなんですか！ ぷんぷん！」

「……」

「……」

「……まあ、冗談はこれくらいにしまして」

「冗談で済めばいいな原村」

「月夜ばかりじゃないんだよ原村」

「……実際、どうすればいいんでしょう。多少我慢して貰っても、根本的な解決じゃないと思うんですよね。それでどこぞの女と浮気とかされても嫌ですし……」

「おい、なんでこつち見たデジタルピンク」

「さすがに怒るよ淫乱ピンク」

「私達が付き合い始めた後も、なんだかんだアピールしてるのに私が気づいてないんですか？」

「……」

「……」

「二人きりはダメだから、なんて言って優希と咲さんと京太郎君の三人でタコスを食べに行ったり。それ、なんの気遣いにもなってませんし。むしろ最大の敵が集まってるんですけれど」

「のどちゃん、それよりも京太郎の事を考えるじよ！」

「和ちゃん、やっぱり対策を立てた方がいいと思うんだ。一緒に考えよう？」

「……いえ、いいんですけど。付き合う時にそうなるだろうなって思っていましたし」

「でも意外だったなー！ 京太郎がそんな絶倫だったなんて！」

「京ちゃん中学でハンドボールしてたから、体力あるのは知ってたけど、そっちもだったんだ。さすがにそれは知らなかったなあー」

「片岡。宮永。話すときは相手を見ましよう」

「……ごめん。でも、好きなんだじよ。奪う気はないけど、触れ合いたいんだじよ」

「本当に、二人つきりにはならないように気をつけてるから。……ごめん、言い訳にもならないね」

「いえ、いいんですよ。覚悟してましたし、私がそちら側だったら同じ事をしてたかもしれませんから。それに、正直……どうせ浮気されるならお二人の方がいいです」

「のどちゃん……」

「和ちゃん……」

「ふふっ。でも、私の彼氏ですからね。たまに貸してあげますけど、そこは譲りませんよ」

「わかってるじえ。気持ちの整理つけるまで、少しだけ……甘えたかったんだじよ」

「中学からずっと一緒だったから、京ちゃんが傍にいないのに慣れないんだ。でも……一人で生きていけるように、頑張るから」

「私が一番、惚れるのが遅かったですからね……。お二人が親友であるだけに、つらく、申し訳ない気持ちでいっぱいです。……ごめんなさい、いろいろ、おかしな話ばかりしてしまいました」

「ううん。私も、かけがえのない親友だと思ってるじよ。のどちゃんが頼ってくれて、悩みを打ち明けてくれて、嬉しかった。なんの助けにもなれなかったけど……」

「いいえ、優希。聞いてくれるだけで嬉しかったですよ。こんなこと、誰にも言えないと思ってましたから」

「私も、和ちゃんと出会えてよかったって、ずっと思ってたよ。京ちゃんと付き合い始めた後も。もし私たちが力になれることなら、なんでも言ってるね。協力するから」

「咲さん、ありがとうございます。少し、心が軽くなりました。また相談に乗ってください」

「うん……えへへ」

「ふわあ……すいません、こんな話をしている時に」

「気にするなよ、私たちの仲だろ！」

「「あはははははは」」

「ん……ふわあ」

「すー……すー……はっ。んう……けほけほ」

「こんにちは、優希、咲さん」

「あつ、の、のどちゃん。やつほーだじよ」

「こ、こんにちは、和ちゃん。部活に来るの、少し遅かったね。掃除当番？」

「いえ。京太郎君に別れ話をされてました」

「……………」

「……………」

「昨日、家に帰ってから気づきました。あんな事を話せばどうなるか。すぐ京太郎君の携帯に連絡しましたが、つながらなくて。そこで確信しましたね。ああ、あのクソ女狐ども、やりやがったなって」

「……にやにや何言ってるんだじよ？」

「……しよしよしようだよ和ちゃん。急にどうしたのほっ!? うう、ひた囁んだ」

「……京太郎君は、優しくて、人を傷つけるような事はしません。外見は不良っぽいのに、とつても真面目で、そんなところに私は、私たちは惚れたんですよね」

「な、なんだ彼ち自慢かー? ままままったくアチュアチュだじえー」

「ほほほほんとにほんとにほっほんほん」

「二人とも動揺が隠せてませんよ」

「……………」

「……」

「彼女がいるのに、その彼女の親友と寝ちやった、なんてことになったら。京太郎君だったら、申し訳なくて、別れようって言うでしょう。いえ、彼は『理由は言えない。だけど、俺に和と付き合う資格はもうない』って言ってましたけど。よかったですね、私たちがこれからも親友でいられるように、隠してくれてましたよ。……そこは、私だけを考えてほしかったですけど。私が彼女なんですから」

「……わ、別れた……の？」

「いいえ。了承しませんでした。理由もなく別れることはできないと」

「そ、そっか……」

「……お二人にとっては別れてくれた方がよかったですかね？ ふふふ」

「ごめ、ご、ごめええええええんん!!!」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「……」

「つい！ つい！ 出来心で！」

「二人で帰ってたら、偶然京ちゃんに会って！ あ、悪魔が、悪魔が囁いたの！ チャンスは前髪しかないって！」

「……」

「全部終わって家に帰ったとき、後悔した！ 私最低だって！ でも、好きなんだ！ 私も、京太郎が好きなんだ！」

「でもでもでも、ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

「……で、二人で京太郎君の家に上がりこんで、京太郎君を縛って、二人がかりで無理やり押し倒したと。信頼とかそういうの以前に普通に犯罪なんです。ご両親がいなくて助かりましたね」

「……」

「……」

「先ほども言いましたが、京太郎君は真面目ですからね。多少揺らぐことはあっても、裏切ることはない。なら、無理やりだろうと見当は

つきます。というか縄の跡が残ってました」

「……て、へ」

「……えへへ」

「はあ……。迂闊でした。思考が鈍っていたんでしようね。本当に、しくじりました。……ま、私も昨日言っていないことはありましたけど。どうですか？ 彼はうまかったでしょう」

「……」

「……」

「最初はそうでもなかったんですが、回数を重ねるうちに、ああなりましたから。ベッドの上ならたぶん無敵ですよ」

「……うん。割とそれも後悔したじよ。体力だけじゃなくてあんなにうまいとか」

「……二人まとめて気絶させられるなんて、京ちゃんの京ちゃんを舐めてたよ」

「……」

「おいおい咲ちゃん。実際に舐めたじやないか。あつはつはつは」

「そういえばそうだった。おかげで、未だに喉がイガイガするよ。あはははは」

「タコス。ぽんこつ。まだ許した訳じゃありませんよ」

「ごめんなさい」

「すみません」

「本当にこの人たちは……。まあ、でも。意外といい案かもしれないね」

「何がだじよ？」

「浮気される前に、発散相手を宛がう。嫌だけど、お二人なら、ギリギリ許せます」

「普通なら、頭おかしいって言うような考えだけど……あれを知ったら、そんなこと言えないよ。むしろ和ちゃん、ずっとあれの相手してたの？ よく壊れなかったね」

「壊れましたよ。二人つきりになったらもうダメです。ダメダメになります」

「あー、やつぱりなんだ。私もだよ。正直、京ちゃんになら何されてもいい！ つて感じ」

「二人とも何恥ずかしい事言ってるんだじえ……」

「優希ちゃんもじゃん。ほら、『いつも犬って言われてるんだ、だったら犬は犬らしくしないとな』とか言われて、後ろからこう……。優希ちゃん、『ごめんなさい』と『許して』しか言えてなかったよ。最後に『だいしゆき……』つて言つて気絶したのは可愛かったけど。皮肉の利いた堕ち方だと思うよ」

「あはははは。そういやそうだった」

「……」

「……」

「……」

「彼女は、私です。結婚するのも、私です。子供を最初に産むのも、私です。それは絶対に譲りません。それでもいいなら……。皆で、一緒になりますか？」

「……のどちゃんがいいなら」

「うん……。和ちゃんが、許してくれるなら」

「……いいですよ。あれを知ってしまったなら……。仲間ですから」

「のどちゃん……」

「和ちゃん……」

「ハーレムなんて許さない、つて一人を選ばせた私達がこう言ったら、京太郎君はなんて言うんでしようね？」

「あはは……。ま、大丈夫だろ。京太郎だし」

「京ちゃん、押しに弱いからね」

「ふふ、無理やり押し倒した人たちは実感がこもってますね。でも！

彼女は私です！ それを忘れないように！」

「はーい。まあ、ベッドの上じやみんな同じ立場だと思っじよ」

「はーい。まあ、ベッドの上じやみんな同じ立場だと思っけど」

「……否定できませんね。ま、こんなことになってしまいましたか」

「……これからもよろしくお願いします」

「おう、よろしくな！」

「うん！」

お父さんのいない日曜日

「須賀君と宮永さんって、同じ中学だったのよね？」

「そうですよ。中一の時から同じクラスだったツスね」

「へえー。だからそんなに仲がいいんだ。最初、付き合ってるのかと思ってたわ」

「ああ、わしも思った。なんというか、お互い距離が近い癖に自然体じゃからな」

「ち、違いますよ。何回も言ったじゃないですか、私と京ちゃんはそういうのじゃないって」

「咲ちゃん、動揺すればするだけ部長にからかわれるだけだよ」

「そうですよ。何もありませんというふうに流せばいいんです。弱みを見せたら骨までしゃぶられますよ」

「ちよつと、私の扱い酷くない？」

「自業自得じゃな」

「むー。じゃあさ、二人の中学時代の話とか聞かせてよ。三年も一緒にいたら何かあるでしょー？」

「中学時代っスか……うーん……」

「ほら、大会じゃチームの連携が大事だし、部員の親交を深める為にこはひとつ。面白い話が聞きたいわ」

「そんなのないですよー。普通の学生でした。ね、京ちゃん？」

「そうだなー。特に……何も、ないな」

「何よー、つまんないわねー」

そのまま、俺と咲の中学時代の話は終わった。部長も特別聞きたかった訳ではないのだろう。すぐに他の話題に移り、俺達への興味なんて最初からなかったかのようにも思える。

「……」

咲が一瞬だけ俺の目を見た。その瞳は何かを伝えようとしているようで——そして、俺にはその内容を一言一句違わず言い当てる自信があった。

つまり——『わかってるよね?』



「京ちゃん、今日も一緒に勉強する?」

中学三年の二学期ともなると学年全体が受験に向けて走っているような、そんな雰囲気を感じる。夏休み前までは最後の部活に情熱を注ぐ奴らもいたし、夏休み中は『この夏休みが勝負だぞ!』と吠える教師を無視して遊び倒す奴が殆どだ。なのに、二学期が始まった途端勉強以外にすることがなくなり、まるで『勉強しろ』と世界が言っているようにすら感じる。まあ、一部の奴はまだ引退してなかったり、勉強する気がなかったりするが。

俺も夏休みの終盤にハンドボール部を引退し、これから勉強を頑張らないといけない身だ。志望校は清澄。学力的には十分合格できると思うが、それで気を抜いて落ちるのも嫌だ。なんたって、清澄は家から一番近い。

そんな訳で、同じく清澄を目指している咲とはよく勉強会を開いている。俺が理数系が得意で咲は文系が得意、とお互いの長所と短所がうまくハマっているので、一人でするよりも捗るだろうと咲が言い出したのだ。勉強を教えあうのはテスト前なんかによくしてたし、気心の知れた仲なので、学校が終わったら俺の家か咲の家へ寄って少し勉強をして帰るのがここ最近の日課になっている。

「ん、じゃあ帰ろっか。今日は私の家にしよ」

「おう」

なっている、のだが……。

咲と連れ立って下校する。毎日一緒にいるので、緊張するとか、周りの目を気にするとか、そういう事とは無縁だ。

昨日のドラマ。最近読んだ本。明日の給食。社会の担当教師のウザさ。そんな話を話しつつ、のろのろと歩く。隣にいる咲はいつもと変わらない。ぼんやりしてて、俺を見ては怒ったり笑ったりして、かにかえば頬を染めて照れる。二年とちよつとの間、ずっと見てきた咲だ。

「ただいまー。京ちゃん、どうぞ」

「おう。おじやましませーす」

咲の家に入る。界さんは平日は仕事でいない。つまり、今この家には俺と咲の二人きり。

知らず知らずのうちに汗が出ていたようで、額に手を当てるとびっしよりと濡れていた。ハンカチを取り出して汗を拭きつつ、咲に付いていきりビングへ向かう。

恐る恐る咲を観察し、振り返った咲の顔を見た瞬間、バレないように気合を入れた。今日もだ。この瞬間は、未だに慣れない。

「ふふっ……今日もつまらぬ一日だったわね。ま、貴方がいれば多少の倦怠も……倦怠も……？　こほん。お茶を淹れてくるから、座ってお待ちなさい」

「……………おう」

そっかー。今日はそいつなんだ。なんだっけ、中世のフランスのお姫様の生まれ代わりがナントカカントカだっけ？

急に背筋を伸ばし、ドヤ顔でこちらを見下ろし（もちろん背が足りないで見下ろしているフリだ）俺に笑いかける咲。いつもよりゆっくり喋っているが、本人曰く「高貴っぽく喋ってる」らしい。まるでわけがわからんぞ。

「あら、どうしたの？　まるで深淵を覗き見た幼子のような貌をしているわ」

「……なんでもないよ、咲」

「咲？ 私はアタナシア。誰と勘違いしているのかしら。ちゃんとやって」

「……そうだったな、アタナシア」

「まったく。愛した女の名すら覚えられないなんて……どうして私はこんなのを愛してしまつたのかしら。ねえ、私の騎士^{ナイト}？」

「……申し訳ない、お姫様^{プリンセス}」

俺がそう言うと、咲はやたらゆっくり座り、ゆっくりお茶を飲み、ゆっくり鞆からノートを出……そうとして落としてしまい、慌ててこちらを素早く見た後、無駄にかっこつけながらゆっくり拾つた。……メンドクせえ。

「さて。まずは数がつ……この世の真理から始めましょうか。騎士、私の隣に侍ることを許すわ」

「……あいよ」

「京ちゃん」

「はい、お姫様」

咲が鼻から『んふー！』と満足げに空気を吐き出し、ニコニコしながら参考書を開く。俺が呆れた目で見ても、まったく気にした様子はない。むしろもう一つ『^{悲哀に満ちた転生記}リザレクシオンブック』と書いてあるノートを開いて、ガリガリと何かを書き込んでいる。きつと、また何かいらん事を思いついたのだろう。

「ふう……。これはいい。たぶんすごくいい。後で予習して貰わなきゃ。……あら、いけないわ。つい現世^{うつしよ}の私が顕現^でしてしまった。許して頂戴」

「ハイ、お姫様」

また増えるのか……。これでいくつ目だ？

えつと……お気に入りの^{アタナシア}理解^{タナシ}されない姫^アだろ。外宇宙の^{クワイエローキャット}語^{プリンセス・オブ・ワールドエンド}られざる姫に、第八世界群の^{総て}の世界に滅びを齎^スす者……こいつお姫様好きすぎだろ。よく覚えてない、一回だけのキャラでもあと十人くらい姫がいるぞ。

「んっふっふー。ふふーん。ふ……ふふーふーふふーん」

よほどいい設定を思いついたのか、鼻歌を歌いつつ二次関数の問題を解き始める咲。

……こいつがこうなってから、だいたい二ヶ月程である。俺が最期の部活に精を出していて、ロクにかまってやってない時期があった。その頃は学校でしか話さず、家で会った——つまり二人きりになった——のは夏休みに入ってからだった。その時急に、「実は私は前世の記憶がある」とか言い出したのだ。いったい何を、と困惑しているとさっきの謎ノートを持ち出して「つまりこれはこうで、こういう裏話があつて、でもそれは私すら知らない秘密で」とか解説し始めて、その時俺は悟った。

——こいつは中二病にかかった、と。

中二病。いろいろ端折って表現すると「なんかこれカッキー」な事をしちやうちよつとイタイ病である。

おれ自身、そういう事を考えた時期もある。ハンドボールで超活躍するのを妄想したり、漫画の必殺技を真似てポーズをとってみたり、だ。すぐに飽きてやらなくなったが、これを後々思い出すと、それはそれは死にたくなるほど恥ずかしい。ネットで調べたらそういうのを『黒歴史』と表現すると知り、ものすごく納得した覚えがある。

「騎士。手が止まっているわ。私の美貌に見とれるのは分かるけど、やらねばならぬ事があるでしょう?」

「……申し訳ありません」

盗み見ていたのがバレて、頬を赤く染めた咲がドヤ顔で言うてる。

……最初は適当にあしらったり、そういうの中二病って言うらしいぞ、と相手をしていなかった。面倒そうだったし。だが、そうやっていると物凄く不機嫌になり、「やってー!」とわがままを言い続けるので仕方なく相手をしてやったら、調子に乗ってこのザマである。

黒歴史を毎日生み出し、それがさらに新しい設定を生み出す悪循環くろれきし

環。唯一安心できる所は、二人きりじゃないところならぬ所くらいである。いや、学校で出しかけた事はあったがその時に「学校でそういうのはやるな。やったら二度と喋ってやらん」と厳しく言いつけたら涙目です承してくれた。かわいそうだがこれも咲の為である。

なあ、咲。いつか未来のお前がこの姿を見たらどう思うんだろうな。その謎ノートを読み返して、何を感じるんだろうな。

「騎士。ここが分からないわ」

「ああ、そこはちよつと分かりにくいけど、ここに線を引いて——」

隣に座る咲の方に身を乗り出して、公式の一つを指差す。教える時は口調は気にしない、も言い含めた約束の一つである。もちろん普通に喋るのは俺だけだが。

「ふふ、ありがとう」

高貴つぽく微笑みながら、俺の首筋を撫でる。アタナシアは俺の前世である騎士と恋仲だったらしい。他のキャラの設定も似たり寄ったりで、二人きりの時に無駄に身体的接触が多くなった。前に「それはやめろ」と言ったのが、譲れない設定らしく聞かなかつた。

ちなみにアタナシアとペアの俺の名前はまだ決まっていな。 「かっこいいの考えとくから！」と前に言われたが、たぶん自分の設定を考えるのが楽しくて後回しにしてるんだろう。こだわりが中途半端だ。

一時間ほど勉強し、いい感じに（いろんな意味で）疲れた所で勉強会は終了する。

咲は夕飯の準備を始め、俺は日によって帰ったり、少しまったりしたり、謎ノートで予習を言いつけられたりする。

「京ちゃん。そういや、明後日なんだけどー」

ここらへんになると、咲の中二病は鳴りを潜める。咲は咲でキャラを維持するのに疲れるらしく、帰るときの挨拶以外はいつもの……発症前の咲と変わらない。だったらやるなよと言いたいが、よく分からない理屈をこねて不機嫌になるのが分かるので何も言わないことにしている。もう、よっぽどの事が無い限り放っておく。それが今の方針だ。疲れるし。

「日曜日、お父さんいないんだってー。だから、一緒に勉強しない？」

言葉だけ聞くといかがわしいナニかを想像するが、要するに「気兼ねなくお姫様できるからかまって」だ。……まあ、どうせ一日も維持できないし、別にいつか。

「やったー。じゃあ、朝から来てねー」

……日曜なのに？

「ふっふーふっふーんふっふっふっふーん」

せつかくの日曜だし、昼までゆっくり寝ていたいんだが……。言いたい事を言いたいだけ言って、ご機嫌で夕飯の準備をしている咲を見ていると、それでもいいかな、と思ってしまう。

「咲、そろそろ帰るよ。また明後日な」

「帰るの？ ご飯食べてかない？」

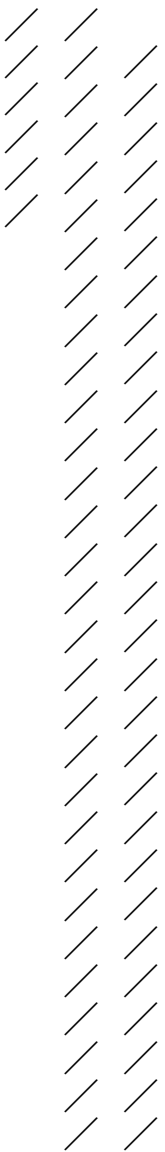
「今日俺の家、肉なんだわ。昨日母さんがそう言った」

「あはは、じゃあ帰んなきゃね。こほんっ。……私の騎士、しばしの別れね。だけど、たとえ世界が、神が、あらゆるものが我らを阻もうとも、必ず貴方を見つけて出しその手を握ることを約束するわ……ばいばい、京ちゃん」

「おう。ばいばい、お姫様」

にこにこ俺に手を振る咲は本当に楽しそうで、その笑顔を見ていると、俺も楽しくなってしまう。

俺もあいつに甘いのが悪いのかなあ、なんて思いつつ。薄暗い帰り道を急いだ。



空はもう殆ど黒くなっていて、西の方だけが仄かに明るい。最近日が長くなってきたとはいえ、部活を終えて帰る頃はだいたいこんな感じだ。

「京ちゃん。……その、ありがとう」

隣にいる咲が、俺から顔を逸らしながら礼を言う。

「……ま、秘密にするって約束だしな。ただ、そういう時は相手の顔を見て言おうな、おひめさま」

俺が笑いをこらえながらそう言うと、咲の肩がビクツと跳ねた後、唇を尖らせながらこちらを向く。

「……。いじわる」

ふんっ！ と顔を背け、『私は拗ねてます』を全力で表現してくる。その姿が面白くて、少し可愛くて、思わずくっくっくと笑い声が漏れてしまう。

こうやって、咲の黒歴史をからかうのは久しぶりだ。あの事は、俺と咲の中でタブーに近くなっていた。正気に戻った咲が恥ずかしさで泣きそうになるし、なにより――。

「……」

未だこちらを見ない咲の横顔を眺める。耳まで真っ赤だ。冷静を装っているが、視線があちこちに飛んでいるのはここから見ていると分かる。きつと、咲も同じ事を考えているんだろう。

咲が中二なキャラをやめた理由は、俺とキスしたからだ。

……もちろん、俺と咲は付き合っていない。今も昔も。ただ、あの日、界さんがいない日曜日。いつもの様にノリノリで中二を演じていた咲は、調子に乗りすぎた。半ば無理やり、俺の唇を奪ったのだ。その瞬間、咲は『やりすぎた』と思ったのだろう。すぐに身を離し、うつむいて、何も言わなくなった。そして俺も、いろいろと察した。咲がお姫様ばかり選んで、俺が騎士だったり、身分違いの恋心を抱く平

民だったりした理由とか。中二をやめろと言ってもやめなかった理由とか。でも、それを言えなくて、気まずいまま適当に笑い話に変えて――。

それ以来、あの事にお互い殆ど触れなくなった。何もなかったと言いつ張るように。少しだけにおわせてみてはすぐに話題を変えたり。……ヘタレだと思う。チキンだ。俺から言い出すべきなんだろう。だけど、その勇気が出ない。そうこうしてるうちに時間だけが過ぎていき、もう一年も経とうとしている。ただの幼馴染を装ってから、一年が経つ。

頭をガリガリと搔いて、気を紛らわす。たぶん、今がチャンスだ。部長があの手を思い出させてくれた今日が。あの日曜日から目を逸らしてきた俺が一步を踏み出す、最高のチャンスなのだ。なのに――。

勇気が持てなかった。言葉が出なかった。

俺はこんな臆病だったのかと、自分自身が嫌になる。咲はきつと待っている。あの後も、度々そんな雰囲気は感じている。今も、俺の言葉を待っていると思う。なのに何も言えない。

そのまま、二人とも黙ったままゆっくり歩いた。西の空が完全に真っ黒になるまで、ゆっくり歩いた。チラチラとこちらを見る咲に目を合わせることができないまま、いつも別れる交差点まで来てしまった。

「……じゃあ、また、月曜に学校で」

「……うん」

背を向けた。ごめん、咲。本当にごめん……肩を落とし、歩き出そうとして――足を止める。

制服の袖を、そっと引かれた。

「あの、き。明後日の日曜、お父さんいないんだ」

上ずった声で、どもりながら咲が告げる。

「だから、さ。あの……よかつたら……」

　　どんだん声小さくなつていく。

「よかつたら、私の家に、来ない？ ……私の、騎士様」

　　最後は殆ど、掠れて聞こえないぐらい小さかった。でも、何を言っているかは分かった。懐かしくて、嬉しくて、恥ずかしくて、申し訳なかった。

「ああ。行くよ。朝イチで行く。だから、準備しとけよ。……お、お姫様」

　　俺が答えると、くすくすと笑い声が聞こえてきて……「待ってるね」という声と共に、袖を引かれる感触がなくなった。振り返ると、小走りで駆けていく背中が見えた。

　　不甲斐ない自分に呆れる。だけど、もう、逃げられなくなった。一年も待たせたうえに、あいつに言わせてしまった。

「怒るだろうなあ……」

　　とぼとぼと帰り道に行く。だけど心は穏やかで、それでいて今すぐ走り出したいほど胸が高鳴っていた。

阿知賀編第四局のあのシーンって心がきゅんきゅんする

「まあ、勝ち進めば、また機会もあるかもな」

隣に座った京ちゃんが私を気遣うように、明るく言った。

……違う。私は、そんなことのために、東京に来たんじゃない。お姉ちゃんと話したくて……麻雀だったら、昔みたいに話せるんじゃないかって、そう思って……。

ぼんやりと中空を眺めている京ちゃんをちらりと見る。何も考えてないように見えるけど……たぶん、私を心配してくれている。ずっと一緒にいたから、なんとなくわかる。私の心に深く踏み込もうか迷っていて、それをしているのか分からなくて、でも心配だから立ち上がれない。そんな感じ。いつもの、不器用な京ちゃん。

中学校の頃からずっとそうだった。私が困っていると、ニヤニヤしたり、からかったりしながら、結局助けてくれる。今まで何回京ちゃんを頼ったのか、自分でも数えきれない。傍にるのが当たり前になっただけで、それが嫌じゃなくて、むしろ嬉しくて……。四六時中くっついてる訳じゃないけど、周りを見回せば近くにいる。

安心するんだ。京ちゃんが傍にいてくれると。いつもバカな事言って能天気になつてる姿に、安心する。頭を撫でられてギュツと抱きしめられてるような、そんな気持ちになる。

京ちゃんなら……家族の事、全部話しても、いいかな？

一度だけ、話そうとしてみた事はあった。東京に一人で行った時、実は京ちゃんに付いてきてもらおうかと考えた。京ちゃんがいれば、なんでもうまくいくような気がして、甘えたくなくなった。お願いしたらきっと困ったように笑いながら、私を導いてくれたと思う。

でも。これは、私の家族の事。私が解決しなきゃいけない事。そこまで京ちゃんに甘えてたら、対等じゃなくなっちゃう。ただ庇護され

るだけの存在になっちゃう。それが嫌で、京ちゃんには話さなかった。私は京ちゃんと対等でいたい。守られるだけじゃなくて、守ってあげられる存在でいたい。

京ちゃんはまだ迷っているようで、少しだけ眉間に皺を寄せていた。

大丈夫だよ。私、がんばるから。京ちゃんと対等でいられるように、がんばるから。……私も、京ちゃんの事、支えられてるよね？勉強とか、そういうのはよく聞かれるけど、それだけじゃなくって。私と一緒にいる時、いつもより子供っぽくなるのは、私といると安心するからだよな？

そうであってほしい。だって、たぶん私は京ちゃんの事が――。

「……なあ、咲。一つだけ、いいか」

京ちゃんの声で我に返る。自分の考えに没頭していて、じつと京ちゃんの事を見つめていた事に気付く。今まで考えていた事もあつて、恥ずかしくて目を逸らした。「なに？」と一言だけ返すと、京ちゃんは言いにくそうに視線をきよろきよろと彷徨わせる。

……聞かれちゃうかな？ 京ちゃん、優しいし。胸の中が、あつたかくなる。でも、教えない。きつと、最後は京ちゃんに助けられちゃうんだらうけど、まだ、頼らない。

京ちゃんの言葉を待つ。本当なら遮るべきなんだろうけど、『京ちゃんが私を心配している』という事実がほしくて、言葉を待ってしまつた。

「一応教えとくけど……ブラジャー、乾燥機に入れないほうがいいぞ。

形が崩れるらしい」

待って、しまった。

えっ……ちよつとごめん、何言ってるの？

「あと、パンツも、縮んだりするからやめたほうがいいとか」

え？ 違うよね？ そこは私が元気ない理由とか、そういうところを聞いてくるべきだよ。パンツ？ なんでパンツ？

普通なら恥ずかしがるべき場面なんだろうけど、そんな場合じゃなかった。そういうのは全部吹っ飛んでいた。

「それにネット使えよ。今俺しかいないからいいけど……他の人も来るんだぞ。丸見えはちよつと」

あ、そういえば持つて来るの忘れてた。やだもー、嫉妬？ 嫉妬してるの？ 京ちゃんかわいいー。

……違う、徹頭徹尾違う。え？ 京ちゃんバカなの？ バカです！ 知ってました！ くそう！ ドキドキを返して！ 私の甘酸っぱい青春を返して！

「それにしても、咲もああいうブラ着けるようになったんだな。スポブラってどういうの？ あんなのばつかだったじゃん」

……え？

「待って、いろいろ言いたい事あるけど、なんでそれ知ってるの？ 場合によっては友達付き合い考え直すよ」

思ったよりも声が低くなっていた。京ちゃんがビクツと体を震わせ、『やべっ』という顔をする。ふふ、可愛いね。ほら吐きなよ。もしかして私の部屋に来た時タンス漁ったとか？ もしそうだったらさ

さすがに許さないよ。いくら京ちゃんでも一週間くらい無視しちゃうよ。

「いや、ほら、夏とか体育の時、ちよつと分かるじゃん。中にシャツとか着ない日あったし。べ、別にじっくり見たわけじゃないぞ？ ただ、目についてしまったってだけで」

「京ちゃんさいてー。しねえ！」
「うぐっ」

脇に置いていたバツクで殴る。全力で殴る。女の子的に許される状況だと思う。

「京ちゃんに期待した私がバカだったよ！　なんでさ！　デリカシーなさすぎだよ！」

「ごめ、ちが、そういうんじゃないよ」

「ばかばかばかばかあ！」

「ふぐう」

崩れ落ちた京ちゃんを見下ろす。ふっ……勝った。でも嬉しくない。暴れて乱れていた髪を整え、最後にもう一発京ちゃんの背中をばちんと叩き、ランドリーを出す。

まったく、信じられない。やっぱり京ちゃんは京ちゃんだった。鼻息荒く部屋に向かいながら、胸中で思いつく限りの表現を用いて京ちゃんを罵る。

さつきまで家族の事で悩んで落ち込んでいたのが嘘のように気分が高揚して、その事実について少し笑みが零れたが——京ちゃんは許さない。

しばらく無視しちゃう。うん。明日の昼くらいまで。

カン！

「あら須賀君。どうしたの、夜に女子の部屋に来るなんて。まさかいやらしい事——」

「は、はは、違いますよ。えつと……咲、います?」

「いるわよ。咲ー? 須賀君が呼んでるわよー」

「……………」

「……あれ? 咲? ……喧嘩でもしたの?」

「いや……喧嘩っていうか……。じゃあ、これ、咲に渡してくれませんか。あ、中は見な……ちよ、なんでもう見てるんですか!」

「やーね、気になるからに決まつ……服? 洗濯したての女もの……ちやんとたたんであるわね。下着まで」

「……………」

「……須賀君、これどうし、つて咲!? いつの間!?」

「……………」

「ぐはあ!」

「なんて鋭いボディブロー! これなら世界も狙えるわ!」

「いや、京太郎を心配してやんなさいよ。というか何があつたんじや……………」

(忘れてたから、持ってきてやったのに…………)

もいっこ カン! (物理)

テルー、大地に立つ

「来てくれてありがとう。こんな遅くにすまない」

テーブルの向こうでぺこりと頭を下げる女性。その姿はつい先日
咲から紹介されたのでよく覚えている。

「いえ。でも驚きました。咲には秘密の話……ですか？」

「うん。個人戦も終わったし、チャンスは今しかないと思ったから」

無表情で俺をじつと見つめる咲のお姉さん。咲によく似た顔でそ
うされると、どこか落ち着かない。

インハイ個人戦も終わり、今日は清澄や仲良くなった他校の人たち
(お姉さんはいなかった)と東京を観光した。俺はオマケみたいな扱
いだったが、それでも何人かとは仲良くなる事もでき、ウキウキでホ
テルに帰——ろうとして、淡にこっそりと話しかけられた。曰く『会
いたがってる人がいる』と。『もしかしておもち美人が』と期待しつ
つ付いていくと、白糸台高校が宿泊しているホテルに案内され、中に入
るところになっていた。

俺を案内した本人はお姉さんの隣で面倒くさそうに肘をついて足
をぶらぶらさせている。その仕草に少し首をかしげるが、とりあえず
放っておく。

「それで、お姉さんは一体——」

「照でいい。まだ認めた訳じゃない。おねえさんなんて呼ばれたくな
い」

「……照さんは、なんで俺を呼んだんです?」

用件を聞こうとしたのに、それよりも気になる事が出来た。『まだ
認めた訳じゃない』だって……? もう仲直りしたはずだ。咲が報告

してきたから、間違いない。心の底から嬉しそうに笑う咲を見て、本当によかったと、そう思ったのに……どういうことだろう。

出されたお茶を一口飲み、照さんの言葉を待つ。緊張を解そうと思つての行動だったが……なんだこれ超うめえ。さつきのおもちな眼鏡の人が淹れたんだらうか。結婚してほしい。

「……聞きたいのは、咲の事。あなたの知ってる咲の事を教えてほしい」

「咲の事ですか？ ええ、もちろんいいですけど」

おっと。一瞬思考がズレていた。

喧嘩してた間の咲の事を知りたい、って事だろうか。中二の時から離れて暮らしていたらしい……でも、そうなるときさつきの言葉と矛盾するような気がする。まだ認めてない……認めてないけど、歩み寄ろうとしている……？

もしそうなら、責任重大だ。ここどうまく話せなければまた喧嘩別れしてしまうかもしれない。それは嫌だ。でも、どういうふうに、何を話せばいいんだらうか。

少し考えて、楽しい思い出を語る事にした。そういう事なら聞いていても楽しいだろうし、二人が話す時の話のタネにもなると思つただ。

修学旅行で迷子になって、俺や先生たちが必死で探したあげく本人はのん気に観光を楽しんでいた事とか、うちのカピーに懐かれていてあいつが家にいるときは傍を離れようとしな事とか。文化祭の話だったり、勉強をよく教えて貰つてる事だったり。色々な事を話しているうちに俺も楽しくなってきた、つい熱が入ってしまった。照さんは薄く微笑みながら「そう」とか「へえ」とか言うだけだったが、淡が「まじで!？」と驚いたり「サキ……ぷっ……くふっ……」と笑つたりと反応が良かったのも原因だろう。気付けば結構な時間が経っていて、完全に夜と言つていい時間だった。

「あつ……と。結構話し込んだんじゃないね」

お茶を一口飲んで——なんだこれ冷めても超うめえ!——ぽりぽりと頭を搔く。二人が仲良くなれるような、そんな話をしようと思っていたのに、殆ど俺の思い出語りになってしまっていた。ちらつと照さんの表情を伺うけど、何を考えているのかよくわからない。元々顔に出ないタイプっぽいし……。少し緊張しながら照さんの反応を待った。

「うん……ありがとう。色々聞けて、嬉しかった。……最後に一つだけ聞く。咲の事を——」

——どう思ってる？

聞いた瞬間、全力で仰け反った。無意識の反応だったが、そうなくても仕方ないと思う。よく分からないが、照さんから圧力が噴出したように感じた。照さんの目から視線を外せない。外せば、死ぬ。そんな未来を幻視した。

何だ？ 俺は何かまずい事をしたか？ 怒っている……違う。怒ってない。確かめている？ そうだ、それに近い。でも何をだ？

「……大切な、幼馴染ですよ」

うまく回らない舌で言葉を捻り出し、見つめ合う。照さんの目がずっと細められたので背筋が凍ったが、すぐ視線が外された。同時にさつきまで押し掛かっていたプレッシャーも霧散し、ほっと息を吐く。

「……そう」

やっぱり無表情のまま、照さんが息を吐く。

……俺みたいなのが傍にいる事が心配だったんだろうか？ 我な

がら外見が不良っぽいという自覚はある。でも金髪は地毛なんだからどうしようもない。緊張が解けたからか苦笑いが零れた。なんだ、やっぱり照さんも咲の事を嫌ってるんじゃないんだな。むしろあんなプレッシャーをかけてくるとか、シスコンと言えるかもしれない。淡が微妙な顔で俺と照さんの顔を交互に見ている。まあ、急にあんな雰囲気になったらそうなるよな。

「もう遅いし、そろそろ帰ったほうがいい。……あ。そういえば、お父さんと会った事は？」

腰を上げつつ「ありますよ」と答える。

咲の家に行った時に会った事はある。特に何かあった訳じゃないから、普通に挨拶した程度だが。

「……じゃあ、残りはお母さんだけか」

頷きながら照さんが呟いた。

母親にも挨拶しろ、って事か。それはちよつと……別にいいけど、そこまでする必要あるんだろうか。戸に向かいつつ、バレないように苦笑する。最後のあれで精神的に疲れたけど、照さんがぶつきらぼうだけど冷たい人じゃないのが分かって嬉しかった。心配しなくてもよさそうだな。

「咲の事は心配しないでください。部の皆もいますし、毎日楽しくやっていますよ。淡も、またな。お邪魔しました」

最後に、振り返って挨拶する。照さんが頷いたのを見てドアに手を伸ばし。

「あつ……忘れてた。君の事は認めただけど、まだ高一なんだから、子供ができるような事は慎むように。あと咲を絶対悲しませないように。」

頼んだよ」

「……は？」

固まる。伸ばしていた手が中途半端に浮く。……え？
ゆっくり振り向き照さんを見る。やっぱり無表情。

「……もしかして、もう……？」

「ひい!？」

またあのプレッシャーが叩きつけられる。しかもさつきより強い。
え？ どういう事？ 子供が出来るって、どういう事!?

「ちよ、ちよ、ストップ！ タイムタイム！」

慌てて腕を振り回し、状況を整理しようとするが、プレッシャーは
増すばかり。ゆらりとこちらに近づいてくる照さんの顔が怖い。無
表情なのにめちやくちや怖い。

「見苦しい……。いくら付き合ってるとはいえ、責任も取れないうち
に……。ちよつと、お話ししよつか」

背後にオーラを背負いつつ、照さんの腕がゆっくり俺の首筋に近づ
いてくる。なんかギョルギョル聞こえるのは幻聴ですか！ 風が渦
巻いて見えるのは幻覚ですか！

「咲が気に入ってるようだから許してやろうと思ったが、そういうつ
もりなら——」

「ち、違いますよ！ 付き合ってますせん！」

「——は？」

「えっ?」

照さんの目がくわっと開かれた。え、もしかして今日ってそういう

目的で連れられてきたの……？

「……ちよつと、一回座っていいっすか？」

「あ……うん、どうぞ」

「キョータローとサキ付き合ってたの!? うっそー!」

テーブルに戻り、深く腰掛ける。気のせいか体が重い気がする。あと淡がうるさい。なんで急にテンションマックスなの？

「……付き合ってたねえよ。確か今日言っ……てないな」

「そーだよ! 聞いてない!」

初対面の人には大体「付き合ってるの?」と聞かれるので、答えた気になっていた。いやでも別に恋人って紹介された訳でもないし……。

「今日遊んだ皆二人が付き合ってると思ってるよ! ぜったい!」

いやいやそれはないって。

「いやいやいやいや。付き合っていないのにクレープあーんしたり手を繋いだりしないでしょ普通。皆ガン見してたのにおかまいなしだったし」

あっ……したわ、そういう事。でもほら、クレープはついやつちやっただけだし……手を繋いだのも、人混みの中で迷子になったりしないようにしただけで……。

「てかSNSで『清澄の大将が彼氏持ちだったとは……』『目の前でバカップルされるとメゲるわ』『麻雀で負けて青春でも負けたあー!!! 絶対来年のインハイでぶっ飛ばす!!!』みたいな投稿ばかりされてる

「まだ認めてないって……」

「……あれか!？」

「それに私もお義姉ねえさんと呼ばれたくないって……」

「あー! そういう意味か! そういう意味だったのか! わっかんねえよちくしょう!」

「咲の事を大切に思っていて、お互い支え合ってるようだから認めてあげようかなって……」

「そうだった! この人咲の姉だった! 宮永家の血はどうなってるだ!」

体から力を抜く。もうダメだ。疲れた。年上にタメ口で突っ込んだけど気にする余裕がなかった。照さんも気にした様子はないし別にいいよね。

「……勘違いだった。すまない」

「テルー、そんな急にキリッとしても遅いと思うよ?」

「淡、うるさい」

「ふぎやっ」

二人がじやれついているのを眺めながら、残っていたお茶を飲み干す。あーやつぱうまいわ。あのおもち美人さん紹介してくんねえかな。一家に一台……家用と学校用で二人ほしい。

「でも、安心しましたよ。認めてないって言うからつきり咲の事かと思いました。仲直りしたんじゃないのかって焦りましたよ」

「……そんな事考えてたの? 大丈夫。もう仲直りした」

「ええ。はあ……精神的に疲れた……。咲を心配してたんですよね、それで俺を呼んだと……安心したけどなんか微妙……」

「……恋人じゃない……ふむ……。よし、そっちの方向に辻褄を合わせよう」

「え?」

あれ？　なんでまたオーラ出てるの？

「咲とずいぶん仲がいいようだが、私としては咲に悪い虫が――」

「テル、それはさすがに厳しいと思う」

「――冗談。私も疲れた。もう寝る」

言うが否や、オーラを収めつつ照さんが立ち上がる。

「ごめんね、色々。でも、さっきも言ったけど、咲の事をよろしく。泣かせたら許さないから。付き合う時は報告するように。じゃ」

俺に手を振り、そして扉を開けて去っていった。

――まじか、あっさりどっか行きやがった。俺どうすればいいの。

「うん……ま、キョータローも災難だったね。ドンマイ」

「お前が原因だろ。責任とれよ。具体的にはこのお茶淹れたおもちさん紹介し」

「ヤダ。キモい。無理」

「ひでえ……」

でもよかった。仲直りしたのは本当っぽいし、シスコンだし。宮永家のぽんこつ遺伝子を忘れていた俺にも責任は……ないな。絶対ない。断言できる。俺は悪くない。

……よし、俺も寝よう。もう一步も動きたくないでござる。机に突っ伏して、全身から力を抜く。ああ、机が冷たくて気持ちいい……。

「え？　ちよつとキョータロー、何してんの？　てか帰んないの？」

うるさい。俺は寝る。

「はあ!？」

ええい、引っ張るな。

「ここ私の部屋なんだけど!？」

ふーん。なら一緒に寝ようぜ。

「死ね! え? マジ? おーい! おーい!」

瞼を閉じるとすぐに眠気が来た。疲労が溜まってるんだろな。明日はいいことありますように。おやすみなさい。

おまけ

『清澄の宮永を泣かす方法を考えよう』

『可哀想なのよー』

『そうだよー。別に彼氏がいる事くらい……くらい……やっぱり羨ましいよー!』

『あつはつはつは! お前ら彼氏おらんのか! 寂しいやつちやなー!』

『お姉ちゃんもやろ……でも羨ましいわー、結構イケメンやったし』
『とりあえず、私が嶺上開花は防ぐ。死ぬ気で塞ぐ』

『私は槍槓狙いかなあ』

『……あのプラマイゼロは防げると思う……?』

『……私が新宿駅に誘導して放置する』

『私がメールで出口教えるフリして混乱させる』

『せめて麻雀で勝負したれや』

幼馴染のいままでとこれから／宮守

よく「沖縄は冬もあつたかい」とか「北海道は夏も涼しい」とか言うが、暑い時は暑いし寒い時は寒い。東北の岩手だつて夏は暑い。統計とか平均とかそういうのじゃなくて、今、クソ暑い。真上にある太陽から直接熱を感じる程暑い。

そう。今、俺は、焼かれている！

「バカみたい。確かに暑いけど、そこまでじゃないよ。沖縄の人に謝って」

「太陽が悪い！」

「太陽にも謝って」

「ほら、胡桃は太陽から遠いから……」

「謝れ」

「ごめんなさい」

隣を歩いている胡桃が目を細めて俺を見上げてくる。ちっちゃい。どこからどう見ても小学生にしか見えない。小三くらいまでは同じか、胡桃の方が少し大きいくらいだったのに、まったく成長しなかった。中三になった今では二人並ぶと兄妹にしか見えない。そんな胡桃だから、順調に背が伸びていつている俺を目の敵にしているのだ。シロもどんどん背が伸びているのに。

「そういうの嫌いって言ったよね。もう言わないって何回も約束したよね」

「いやあ……ちつこくて可愛いぜ？」

「京太郎に言われても嬉しくないよ。人のコンプレックスを笑う人は最低だから」

「わりいって」

「ふん！」

胡桃が俺を置いて早歩きで進んでいく……が、歩幅の違いからか、少し大股で歩くだけで余裕で追いついた。「ハア？」みたいな顔でこちらを見てくるが、今から同じ場所に行くのに別々に到着するのもおかしいだろう。そのうちムキになったのか胡桃は走り始め、俺も釣られて駆け出す。

「なんで！ はあっ ついてくんの！ んくっ バカ！」

「いや、どうせシロんち行くんだし……」

結局、シロの家につくまで数分間走りっぱなしだった。

胡桃が息を荒くして扉に手をついてうなだれている。俺はジョギング程度だったが、胡桃は俺から逃げようとずっと全力疾走だった。そりやそうなるよなあ……。

チャイムを押して少し待つが、反応はない。携帯が一瞬だけ震えたのでいつもの様に勝手にドアを開ける。胡桃を持ち上げてたたきに座らせるとのろのろと靴を脱いだので、また持ち上げてリビングに向かう。

勝手知ったるシロの家。もうずっと昔、小学生の頃から見慣れた光景だ。俺、胡桃、塞、シロで遊ぶ時はだいたいシロの家に集まる。家の距離的には俺と胡桃の家が塞とシロの家の中間にあるのだが、行くのがダルいとシロが約束をすっぱかすのでいつの間にかこうなっていた。

「おっす」

「やほ……」

「……お土産？」

リビングに入ると床にぐでーっと伸びている謎生物もといシロがいた。クーラーが効いていて、汗がすっと引いていく。抱えていた胡桃をシロの傍に「お土産。うちの地元で獲れたんすよ」と置いた。「おお……」と声を上げるが、たぶん何も考えてない。腕すらピクリと

も動いてない。こいつはまったく……。

「おばさんいねーの？ 勝手に茶、もらうぞ」

「ん……いない。いーよ」

戸棚から自分のグラスを取り出す。いつかのクリスマスのお互いのを選び、ここに置いてあるのだ。ついでに塞と胡桃の分も出し、麦茶を注ぐ。

「はい、お茶」

「うん……ありがと……」

胡桃にお茶を渡すと、一口飲んで床に伸びた。シロが増えた、とどうでもいい事を考えてると『ピンポン』とチャイムが鳴った。玄関に向かいドアを開けると塞が立っていて、「やつ」と手を上げていた。今日はいつものお団子ではなくポニーテールにしていた。暑いからだろうか。「須賀君だけ？ 胡桃は？」「シロになった」なにそれ意味わかんない」と会話を交わしつつ、リビングへ。首を傾げていた塞だったが、扉を開けるとすぐに納得したようだ。「シロだ」と呟いて頷いている。やつぱり、あれを表現するならシロしかないよな。くすくす笑う塞を見て、もう一度胡桃を見——ようとして、塞の手が俺の目を覆った。

「え？ なに？」

「ちよつと待って。胡桃、パンツ見えそう」

衣擦れの音がした後、すぐに当てられていた手は離れた。胡桃が頬を赤くしながら、正座している。

「……別に見ねーよ」

「……。塞、やつほー」

「うん。暑いね、今日も」

「スルー？」

「うるさいそこ！」

「理不尽じゃねえ？」

大体、男は俺一人で男の方が少ないんだから、女の方が気を遣うべきなのだ。見せられてもこっちが困る。困るだけで見たくない訳じゃないけど。

ぼやきながらソファに座る。足元にシロがいるのがちよつと邪魔だ。背中をぐいぐい足で押すが、一ミリたりとも動く気配がない。諦めて適当に足を投げ出した。片足だけシロを跨いでいる形になる。

「こらっ。友達を足蹴にしない」

「おー」

胡桃から注意が飛んでくる。仕方がないので、足をシロとソファーの間に捻じ込んだ。足の甲がシロの背中に当たっているが、まあ、いいだろう。

「あれ？ おばさんいないの？ ご飯は用意するから食べずに来てって言ってなかったっけ」

「あ、そう言えばそうだ。シロ、どういう事？」

胡桃と塞が時計を見ながら不思議そうにしている。時刻は一時を少し回った所で、ちょうど昼飯時だ。シロがダルそうに「ん……」と呟くので、足で押して続きを催促する。揺らされたシロはちらりと俺を見た後、ゆっくり口を開いた。

「そうめん……」

素麺？

「貰いすぎて困ってるから、皆で食えって……」

『あー……』

三人の声が重なった。おばさん、文句言われないうわぎと留守にしているに違いない。シロとは違いアグレッシブな人だからなあ……。想像の中の彼女は『よろしく！』とにっこり笑っていた。

「じゃあ……作ろっか。胡桃、手伝って」

「おっけー」

塞と胡桃が台所に向かう。よく考えると、去年も似たような事があった気がする。あの時は……スイカだったか？ おばさんがニコしながら「よければ食べて」と持ってくるから喜んで食べてたら、どんどん持ってきてられて困ったんだ。一人で半玉くらい食ったから腹壊しかけたんだよなあ……。

思い出しつつ、足元のシロを見る。胡桃達がいなくなったのに、動く気配がまったくくない。

「シロ、お前んちなのに手伝わねえの？」

返事がない。足でぐいっと。また俺を見てくるが、今度は視線を外してこない。じとつとした目で見つめてくる。普段は気にしないが、シロの整った顔でそうされると少し緊張する。こいつこんなに可愛かったっけ……？

「準備はしてあるから、後は茹でるだけ。あと、京……」

ダルそうに呟いた後、シロが口ごもる。言おうか言うまいか迷ってる、そんな感じだ。

「……………」

そのまま口を閉ざしてしまい、俺も続きを促すタイミングを逃してしまった。お互い見つめ合う。

ちなみに、京と俺を呼ぶのはシロだけだ。『きようたるう』は長くてダルい、『きよう』は今日と被って面倒、だから『けい』らしい。正直、人の呼び方まで楽をしようとするのはどうかと思う。

「何してんの？」

「俺もわからん」

胡桃が皿を並べてる間も俺とシロは見つめ合っていた。視線を外したら負け、みたいな雰囲気か漂っていた。根気比べだ。

胡桃が台所に戻って行った後も、じっと見つめ合う。瞬きすら我慢する。頬の筋肉がピクピクしてきのでいい加減諦めろと密着している足を動かすと、シロがすつと目を伏せた。勝ったな……と一人で頷いてると、「京、ちよつと」とシロが手招きしてきた。耳を貸せ、という事らしい。

「なに？」

「いいから……」

シロに尋ねても目を伏せたまま手をチョイチョイし続ける。そつと顔を寄せるとシロも顔を寄せてきて「足、やめて」と耳元でささやいた。息がかかってくすぐったい。なんだそんな事かと思っただがそれだけじゃないようで、シロは更に言葉を重ねた。「ブラの紐……当たってるから……」と、恥ずかしそうに。

……なるほど。これ、ブ……下着の紐なのか。そう言われると足の甲に何か違和感がある。よく見ると、Tシャツ越しに線が浮いてるようにも見えた。俺はずつとシロの下着の紐を、こう、足でスリスリしてたんだな。そっか。

「……」
「……」

すつと足を退ける。

「……」
「……」

シロが俺の方を向いたので、横を見て視線を合わせないようにする。……気まずい。

「京。なんか言ってる……」

「……ごめん」

「他には」

「ごめん？」

「……すげべ」

「わざとじゃない」

「……そう」

それっきりシロが黙ったので、更に気まずくなる。一度気にするとそればかり考えてしまい、シロの柔らかさとか、最近育ってきたおもちとか、そういうものを意識してしまう。頭に血が上ってくるような熱くなる感覚に戸惑い、逃げるように台所に行こうとしたところで塞と胡桃が戻ってきた。タイミングが悪い。ソファアールから離れテーブルの近くの床に座る。もちろん、その間シロの顔を見ることは出来なかった。

「できたよー」

「ほら、シロ、ちゃんと座って」

「ん。いただきます」

「いただきます」

胡桃たちの手前、すまし顔で平静を装ったが、心臓が早鐘のように打たれていた。シロも普段のダルそうな雰囲気だが、よく見るとこちらを気にしている様子がバレバレだった。たぶん、俺も傍から見たら同じなのだろう。胡桃たちが不思議そうに俺とシロを見ている。何も聞いてこないのが救いだっただ。

「薬味いっぱい用意してあったけど、どれくらい食べたらいんだろ。『全部食べていいよ』ってハートマーク付きの付箋貼ってあったけど、五十人分くらいあったよあれ……。とりあえず六人前茹でてきたけど」

「多くね？」

どうりで山が出来てると思った。ネギとノリをつゆに浮かべ、素麺をぶち込む。まあ……普通にうまい？

どうでもいい雑談をしながら、少しずつ山を攻略していく。

「京太郎お腹減ってるでしょ？ 午前に部活行ってたし」

「あー。今日は掃除だけだったから、そんなに。なんか部室綺麗にしてるって先生がキレてたー、って急に集合かかったんだよな。休みだったのに」

「へえ。須賀君も怒られた？」

「いんや。てか別に怒ってなかった。一年坊の勘違い」

「ハンドボールの顧問の先生いつも怒ってるみたいな雰囲気あるよね。そうだ、大会もうすぐだっけ？」

「再来週。終わったら引退なんだよなー。変な感じ」

「応援行くよ。頑張ってるね」

「さんきゅ」

もつきゆもつきゆと素麺を食べる。食べる。胡桃が早々に箸を置

きまったりムードに入ったので、まだ食えと素麺を胡桃のつゆにぶち込んでやった。怒られた。

なんとか全部食べ終えた頃には腹がパンパンになっていた。たぶん、二人前と少しは俺が食ったと思う。

「片付けは俺がするわ」

皿を重ね、回収していく。準備はしてもらったし、これくらいはしないとな。もちろんシロは動かない。期待すらしてない。流しで皿を洗いつつ、残りの素麺を発見して『これはしばらく素麺尽くしだな』とシロ家のご飯に思いを馳せる。可哀想に。

片付けを終わって胡桃たちの所に戻ると、麻雀の準備がしてあった。既に山も積まれている。

「じゃ、やろっか」

ジャンケンで親を決め、牌を取っていく。本来は場決めからサイコロでいろいろするのだが、今回はただ遊ぶだけなのでそこらへんは適当だ。

「今日は塞がないから。疲れるし」

「……よし」

「シロ嬉しそう」

「いつも迷った瞬間塞がれるもんな。分かりやすいのが悪いんだよ」

「須賀君は塞ぐ必要ないから楽だわー」

「普通に強いからな！ おい、なんだよその目は」

「役満狙いすぎて聴牌すらできない人が何か言ってるなあ」

「喋ってもいいけど手は止めない！」

ここ最近部活が忙しく、四人で麻雀をするのも久しぶりだ。胡桃達と卓を囲むようになってもう数年経つが、皆飽きる事なく続けてい

る。ダルいダルいと何事も楽をしようとするシロも、麻雀だけは嫌がらない。ダルそうなのは変わらないが。

小学校高学年の頃、動かない遊びをシロのために探していた時に出会ったのが麻雀だった。その頃は麻雀をするというより、四人で一緒にいるための道具みたいな扱いだ。皆が本格的に『麻雀』を始めたのは中学に入って暫く経った後で、その時俺は既にハンドボール部に入っていた。面子が足りないと言われたので休日なんかにかこうして打ってるが、俺の腕はあんまり良くない。戦績で言うとしロの一人浮きで、胡桃と塞がその少し下、俺が更にその下だ。まあ、対戦相手としては強すぎず弱すぎずで、ちょうどいいくらいではないだろうか。

「皆、宿題した？ 京太郎は今年こそ一人でやってよ。絶対見せてあげないからね」

「まだあと三週間あるじゃん。大丈夫大丈夫」

「毎年それ言ってるよねー。シロですら自分でするのに」

「胡桃がうるさいし……」

ガチでやるのは集まったときの最後の一回くらいで、それ以外はこうして喋りながらの対局だ。

「京太郎は期末試験散々だったんだから。本当は受験勉強しなきゃいけない時期なのに、部活か遊びに行くばっかりなんだし」

「大丈夫大丈夫。いざとなったらシロに勉強教えて貰うし」

「え……私……?」

「シロが一番教えるの上手いからなー。頼りにしてるぜー」

「まあ……京が言うなら……考えとく……」

そうこうしているうちに胡桃が和了った。いつもダメってるから急に和了られて驚くんなんだよな。あと少しで国士テンパれそうだったのに。

点棒を渡し、牌を混ぜていく。手積みなので面倒だ。山を積み直して、東二局開始。

「受験勉強かあ。あと半年したら卒業なんだよね。なんかそんな感じしない」

「そうだな。ま、たぶん今のままでも受かるだろうし、大丈夫だろ」

「え？ 京太郎はちよつと危くない？」

「いやいや。お前らは宮守だろ？ 柳国は宮守より偏差値低いし」

『……………え？』

「え？」

三人の牌を取る手が同時に止まった。目を丸くして俺を見ている。

「言ってなかったっけ？ 俺やなくて柳国高校志望だよ。ってか一番近い共学

あったし。近いっつっても一時間くらいかかるけど…………」

「聞いてないよ。え、宮守行かないの？」

塞が身を乗り出して問いかけてくる。

「いや、行かねえよ…………男子いないし」

「でも共学じゃん、一応」

そう。ここから最寄の高校は宮守高校で、そこも共学である。ずっと女子校だったのだが、少子化やら生徒数減やらで一昨年共学になったのだ。…………が、未だに男子生徒はゼロである。少し遠いが柳国があるし、そっちの方が簡単なのでここらの男子は皆そこに行く。誰も好き好んで肩身の狭い思いはしたくないのだ。俺の同級生も、殆ど柳国か、それ以外の高校で、宮守志望はいない。

「…………え？ ちよつと待って。本当？ 冗談じゃない？」

「本当だけど」

胡桃も身を乗り出し、俺に詰め寄る。ここまで驚く事だろうか。普通に考えたら、そうなると思うんだが……。

「まあ、宮守は殆ど女子校みたいだもんね……」

「そうそう。さすがに入るの気まずいわ」

「私、てっきり宮守だと思ってた……っていうか、私達は宮守って前から言ってたから、同じ高校行くものだ」と

「お前らがいるから大丈夫かなーってちよつと思っただけ。まあ……なああ?」

「ハーレムだよ? そういうの好きじゃないの?」

「現実はそのなに甘くないだろ、きつと」

他の男子より女子に慣れているという自負はあるが、それはこいつら限定な訳で。せつかくの高校生活を気まずい三年間にはしたくない。

「あ、あと寮に入るかも」

「は?」

「え?」

「……」

柳国は長い事こころへんの男子を受け入れていたためか、大きな寮がある。寮費も高くなく、通学の手間が省けるので殆どの奴が寮に入る。俺もそうしようと思っていた。毎日一時間多く眠れると考えたら、入らない理由がない。

特に気負う事なく言っただが、三人の反応は先ほどよりも大きかった。

「な、なんだよ……?」

ビクビクしながら三人の顔を伺う。胡桃はポカーンとした顔、塞は一瞬顔をしかめたが、すぐにいつもの顔に戻った。シロは……。

「……京」

「シロ？ どうしっ——」

シロが急に立ち上がって、俺に詰め寄る。驚いて後ずさるが、肩を掴まれて身動きを封じられた。

「本気？」

顔をずいっと近づけられる、あと少しで鼻が当たりそうな距離だ。

「ま、まだ完全には決めてないけど……入ろうかなって」

「違う。寮だけじゃなくて……柳国に行く、って所も」

「あ、ああ。それは一応、そう思ってるけど……」

たどたどしく答えると、シロは目を伏せた。しばらくそのままの体勢で何も言わず、気まぎらくなって声をかけようとしたところで、ようやくシロが顔を上げた。

「いやだ」

シロが俺の目をじっと見つめ、縋るように呟いた。

「……なんで」

「……お世話する人とか、必要だし……」

「胡桃たちがいるだろ」

「……でも」

「あー……そんなに？ 俺が柳国行くの、嫌なのか？」

「うん」

「男子俺だけになりそうなんだけど」

「私達がいる。何かあつたら味方する。だから、一緒に宮守に行こう」

考える。ここまでシロが言う理由はなんなのか。もしかしたら、とか。やっぱり、とか。色々考えたけど、はつきりとした答えは出なかった。ただ、離れたくないとシロが思っている事だけは分かった。シロの肩を叩いて、少し距離をとる。

「……胡桃と塞は？ どう思う？」

シロが振り返って、二人に問いかけた。二人は俺達のやり取りに呆然としていたが、少し考えた後すぐに口を開いた。

「京太郎が自分で考える事だと思うよ。柳国に行ったからって、一生離れ離れになる訳じゃないし。でも、一緒に宮守に行けたら楽しいと思う」

「私は……宮守に行ってほしい。須賀君も含めて『みんな』って感じだから。どうしても柳国がいいなら、止めないけどさ」

考える。俺はどうしたらいいのか。

「京。考え直して。……お願い」

考えて。わりとすぐに答えが出た。

「じゃあ宮守にすっかな」

「え」

「はっ」

「よし」

シロがぐつと小さくガッツポーズを取り、そそくさと自分の席に戻

る。俺があっさりと答えたからか、胡桃と塞がガクツと肩を落とした。

「いや、さつきも言ったじゃん。別に宮守でもいいかなって。でも、勉強教えてくれよ、シロ」

「ええ……」

「いやお前のせい……って言うのもおかしいか。まあ、頼むよ。宮守狙うけど、受かるか分からないし」

「ダル……けど分かった。任せて」

「ちよちよ、待って。そんな軽いの？ 私結構真面目に考えてたんだけど」

「なんだよ塞。俺も真面目なんだが」

「絶対違う！ もっとほら、あの、なんかあるでしょ!?! それでいいの!?!」

「いいんじゃないの？ お前らいるし。あ、でも宮守に男子トイレあるのかな……先生と同じトイレとかだったら嫌だな……」

「心配するのそこ!?!」

「大丈夫。やばい時は一緒に女子トイレ入ってあげる……」
「何言ってるの!?!」

塞のツツコミが止まらない。俺とシロがくすくす笑っているのも気付かず「はあ？ なんで？」と頭を抱えている。

「……そんな事だと思ったよ。京太郎、宮守行くなら本当に勉強しないとダメだからね。宿題、一人でやってね」

「大会終わったらやるよ」

「もう……」

胡桃が呆れ顔で首を振っている。

「まあ、俺もお前らと離れたくないし。せつかくの幼馴染だしな」

これは本心だ。どうせなら一緒に居られるようにしたい。だから寮に入るのは迷っていた。

周りの男子が柳国入寮コースだったから俺もなんとなくそう思っていただけで、シロが同じ学校がいいと言うなら宮守に変えるのも悪くない。

塞とシロは小学校、胡桃とは物心つく前から。女三人男一人の少し変わった幼馴染だが、俺はこいつらが嫌いじゃなかった。

「あ。そっか、そうだ。いい事思いついた」
「ん？」

塞が頭を上げ、ニヤリと笑った。

「高校入ったら、皆で麻雀部作らない？」

麻雀部？

「そう。男子ハンドボール部絶対ないし、須賀君暇になるでしょ？
だったら丁度四人だし、どうだろ。もし部費出たら自動卓とか買える
かもしれないし」

「なるほど」

「それいいかも。大会も出られるかもね！」

「え、ダル……」

「団体は五人だから、あと二人か。二人ならなんとかなるよね」

「男子は個人確定じゃねえか」

「私頭数入ってるの……」

「目指せインハイ優勝！」

「いいねそれ！」

「あの……」

『高校に入ったら』

『皆で』

『何をしよう?』

わいわいと、そんな話題で盛り上がる。胡桃と塞は楽しそうに、シロはダルそうに。まだまだ先の事——そう思っているも、すぐにその時は来るんだろうが——を皆で話し合う。あれがしたいこれがしたいと、まだ受かったと決まった訳でもないのに。

それでも、悪い気はしなかった。もしかしたら、今日の事がなくても俺は宮守を選んでいたかもしれない。まだ俺は、柳国に行けば皆と離れるという事を実感していなかった。最後の最後で一緒に道を選んでいたかもしれない。

「つてかいいい加減麻雀やろうぜ」

「あ、えっと……次親誰だっけ?」

「えっと……もう最初からしよっか。ガチの一回ね」

「えー! 私さつき和了ったのに!」

「もっかい山積むの? ダル……」

宮守に入れば、三年は楽しい日々が続くだろう。そう思うと、勉強するのも頑張れそう。たぶん、みんなに教えて貰う事になるだろうけど——別にいいよな、幼馴染なんだし。少しくらい頼っても。

「じゃ、改めて東一局。よろしく」

「よろしくお願いします」

「よろ……」

「よろしく」

よろしく、みんな。

おまけ

「……で、さっきあんなにマジだったけど、なんで？」

「……分かってるくせに。塞もでしょ」

「……何の事か、分からないな」

「そ。でも、私、これだけは諦めないから」

「……あっそ」

おまけのおまけ

「驚いたよ。柳国に行くって聞いた時は」

「そうか？ 俺の友達も皆柳国だぜ」

「そうだけど、なんか京太郎だけは宮守に行くって思い込んでた」

「ふーん」

「なんでだろ。おかしいなあ」

中学時代の京太郎と咲がダベるだけ

「京ちゃん、世界で一番大切なものって分かる？」

「……さあ？ 何？」

「すぐ聞かないで、少しは考えて」

「えっと……金？ 命？」

「はあ……分かってないなあ。それはね、とっても素敵で、とっても暖かくて、何よりも強い。世界で一番尊いものなの」

「……で？」

「愛じゃよ、京ちゃん。愛じゃ」

「……………」

「……ふふん」

「また本からパクったのか。お前、気に入ったのすぐ言いに来るのやめろよ」

「なんで。いい言葉じゃん。文句あるの!？」

「ないけど……」

「死の呪文すら跳ね返す最強の守りなんだよ!？」

「いや、魔法なんてないし」

「そういう事言う!？ 今そういう話してるんじゃないの!？」

「お、おう……。あれ、それって映画になってなかったっけ」

「なってるよ。でも、最終巻まで読んでから観ようと思って」

「ふーん」

「……興味ないね。京ちゃんはもうちよつと、本とか読もうよ。マンガしか読まないじゃん。ファンタジーだったらマンガっぽいし、ライトノベルとかは難しくないからおすすめだよ。何か貸してあげようか？ あ、さっきの言葉の本とか」

「え、いいよ」

「なんでそこで断るの？ おすすめだよ？ 面白いよ？」

「いやほら……。どうせ読まないし……」

「えー……。じゃあ、私が最終巻まで読んだらさ、一緒に映画観よう

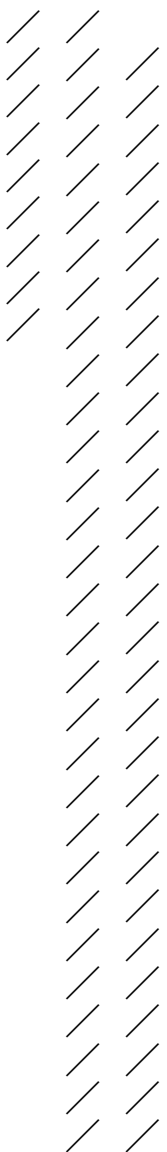
よ。ビデオ屋さんで借りて」

「おつ、それならいいぜ。ポップコーンとかポテチとか買ってき」

「そうそう。プチ映画パーティーだよ」

「おー、楽しみにしてる。早く最後まで読めよ」

「言われなくても読むよ。っていうかなんで自慢げなのさ」



「京ちゃん。フィボナッチ数列って知ってる?」

「知らん。数学?」

「うん。前の二つの数の和が次の数になるっていう……」

「もうちよつとわかりやすく」

「1・1・2・3・5・8・13、みたいな感じで続いてく数の事だよ。

ほら、足したら次のになるでしょ?」

「おお、そうだな。……で?」

「実はこれがね、自然界の中にもいっぱいあるの。花びらの数とか、ヒマワリのあの螺旋の数もフィボナッチ数なんだって」

「へー。で?」

「ううん。それだけ。私もよくわかんない」

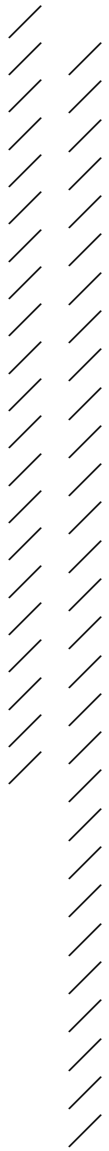
「だよな。お前、理系苦手だもんな。その代わり文系っていうか、国語がすごいけど。やっぱ本読むからか?」

「たぶん。私、国語で悩んだ事ないよ。あ、古文とか漢文は除いて」
「すげえな」

「でしょ? もつと褒めていいよ。日本のダ・ヴィンチって呼んで」

「その人画家じゃなかったっけ」

「なんか、研究とかしてて、すごいらしいよ。よくわかんないけど」
「ふーん」



「あれ、お前がリングつけるなんて珍しいな。……って、去年俺がやった奴じゃん」

「たまには着けようかなって。学校には着けていけないし、休みの日しか出来ないおしやれだよ」

「お前がおしやれとか言うのと違和感やべえな……なんか変なものでも食ったか?」

「ええ……。私だって女の子なんだよ?」

「そうだけど……俺がプレゼントした時、全然着けなかったじゃん」

「京ちゃんだって、今は全然着けないじゃん。中二の頃は無駄に『シルバーかっけー!』とか言ってたのに」

「そりゃ、なあ?」

「クラスの子に『ヤンキーみたい』って言われたの気にしてるの? 確かにすごくチャラかったし一緒に歩くのは遠慮したいけど、似合っていない訳じゃなかったよ」

「すっげえ貶してんじゃん」

「まあ、そんなだから私が着けてあげようかなって。どう?」

「ん、似合ってるぞ。なんせ俺が選んだからな」

「その自信はよく分らないけど。センスはいいと思うよ」
「だろ?」

「うん。あとさ」

「ん？」

「私、消えてたりしないかな」

「は？」

「こう、透明人間的な」

「……あ、なるほど。この前観た映画か？ でもマントなんてねえじゃん」

「違うよ！ このリングだよ！」

「……わかんねえ。何？」

「なんか幽霊みたいなのが追ってくるの。あと目玉」

「うん。腹減ったしどっかでメシ食おうぜ」

「ちよつと、無視しないでよ」

「ラーメンとか嫌か？ ハンバーガーとか、こう、ガッツリ食いたいんだけど」

「別にラーメンでもいいよ。そうじゃなくて、ほら。このリングみて『愛しい人……』みたいな気持ち湧き上がってこない？ 少し古いけど、有名なファンタジーでき、今のファンタジーの」

「よっしゃ。この前ダチが旨いところ見つけたって言ってたから、そこ行くか」

「京ちゃん！ 置いてかないでよ！」



「京ちゃん、来週大会だよね？」

「おう」

「最後の大会だし、応援行くよ」

「別にいいって。県予選だし」

「まあまあ。それでさ、一つ質問なんだけど。野球だったら、甲子園とかじゃない？ ハンドボールって全国大会どこでするの？」

「ああ、決まってないんだよ。関西とか関東とか年ごとに違うっていうか」

「へー。じゃあ、あれ言えないね。あれ」

「あれ？」

「私を甲子園に連れてって。とか」

「あー、言えないな。全国に連れてって、なら言えるけど。でも、お前がマンガの話するの珍しいな」

「この前、テレビでやってたよ」

「なんだ映画か。観てないな」

「録画してるけど、うち来る？」

「いや、大会あるし。終わったら行くかも」

「うん。でも、正直あんまり面白くは……」

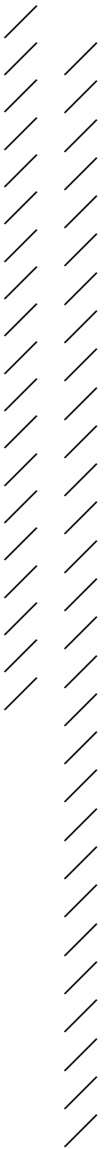
「観る前からそういうのやめろよ。面白くないと思って観ると全部つまらなく感じるだろ」

「あ、でもヒロインは可愛かったよ」

「おもちは？」

「黙って」

「はい」



「あのさ、もし、もしもの話だけど」

「うん」

「私が事故にあつて、指一本しか動かせなくなったらさ」

「うん？」

「私の代わりに、事件を解決してくれる……？」

「うん」

「そっか」

「うん」

「あのね、安楽椅子探偵っていうのは昔からよくあるものなんだけど、この本はちよつと違つてね」

「うん」

「動かないんじゃないかと、動けないの。でも、一本だけ動く指で部下に指示を出して、犯罪の証拠を集めて、事件を解決するの」

「へー」

「本人の推理力だけじゃなくて、物的証拠を重視するのも特徴かな。昔の有名作品もいいけど、最近のベストセラーもなかなかだよ」

「そうだな」

「それに推理小説は『トリックを思いつく力』と同じくらい『トリックで読者を魅せる』力も必要だからね。何回も使われたトリックでも『ああ、そんな！』って感心するような、歴史の積み重ねを使ってストーリーを作るのも推理小説だからね」

「ふーん。あのさ」

「うん」

「今映画観てるんだからちよつと黙れよ」

「ごめん……昨日ハマっちゃって……」

「後で聞いてやるから」

「ありがと」





「っていう事が中学時代、よくありまして。こいつ、本とかにすぐ影響されるんですよね」

「もう、京ちゃん……そういう恥ずかしい事バラすのやめてよ」

(色々聞いたけど……)

(こいつら……)

(イチヤついでるようにしか)

(聞こえなかったじえ……)